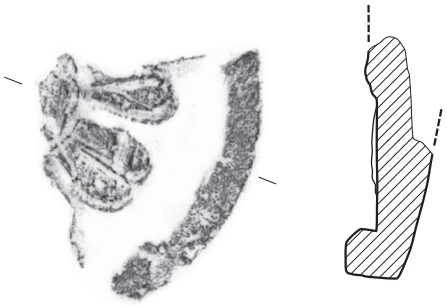
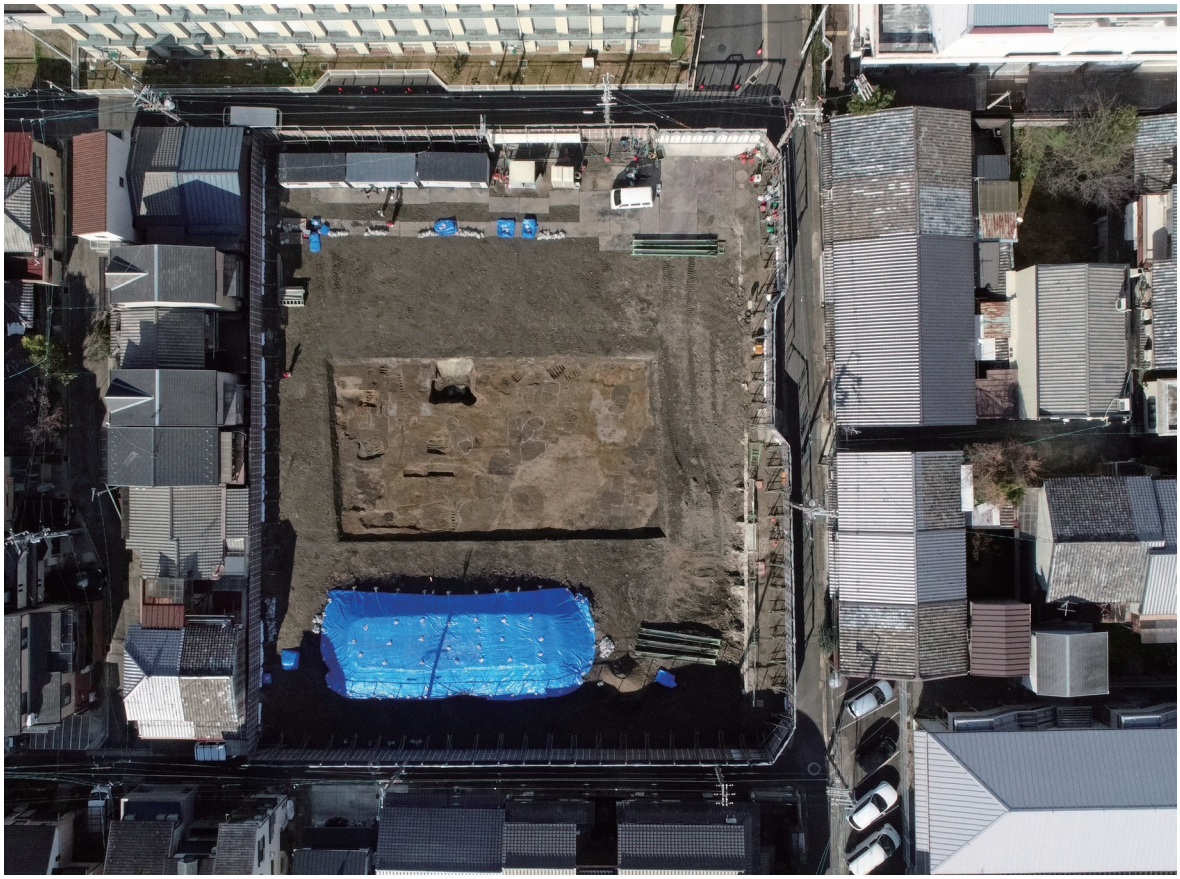
平安京跡左京七条一坊十二町
発掘調査報告書



２０２２

龍　谷　大　学

（1）調査地上空から東を望む



（2）調査区全景（上が北）

序

2023（令和５）年４月の心理学部開設に伴う、旧留学生寮「大宮荘」跡地の発掘調査が2022年１月から３月にかけて行われました。このたび調査を担った龍谷大学は、1639（寛永16）年に西本願寺境内に開設された僧侶養成機関「学寮」にはじまる、実に383年に及ぶ歴史を誇る教学、研究の拠点であります。

龍谷大学の所在する七条大宮一帯は、平安京から江戸時代までの街並み痕跡を街路名や地割りからよくたどることのできる場所です。「七条」は平安京の街路である七条大路、「大宮」は平安宮の東を画する大宮大路という街路と、それぞれ古代の都の条坊名に由来します。いずれの街路も東西の公営市と関係して、都の内と外を結ぶ交通の要として機能していました。当時の文献史料や絵画資料から、道沿いに賑やかな都市空間を形成されていたことが知られています。今回、発掘された場所の地名「西酢屋町」も本願寺の周囲に江戸時代に形成された寺内町と関係する地名でしょう。このように歴史ある土地柄ですが、意外にも発掘調査地点付近に誰が居住し、どのような活動をしていたかを知る具体的な資料がほとんど残されていないのが実情です。

発掘地は、平安京左京七条一坊十二町北東部にあたります。発掘の結果、平安時代初めと鎌倉時代の井戸跡が多数発見されるという重要な成果が得られました。出土品には、表紙のカットにした東寺との関係を示す鎌倉時代の軒丸瓦や中国から輸入された青磁、鍛冶に関わる資料もあります。今回の発掘は、これらの出土資料も加えて、未解明であった当地の性格を解明するための新たな歴史資料を得たものとみています。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にご尽力、ご協力くださいました関係各位に厚く御礼申し上げます。

2022年８月

龍谷大学文学部長
玉木 興慈

例　言

1　本書は、京都市下京区西酢屋町16番地で実施した、平安京跡左京七条一坊十二町の発掘調査報告書である（京都市番号　21H218）。

2　調査は、龍谷大学大宮荘跡地計画に伴う事前調査として実施した。

3　調査は、学校法人龍谷大学を主体として、大宮荘建替えに伴う埋蔵文化財調査委員会（委員長：玉木興慈）の指導のもと、國下多美樹・木許 守（文学部歴史学科文化遺産学専攻教授）が担当した。

なお、現地調査では、株式会社文化財サービス（担当：辰巳陽一）の支援があった。

4　調査期間は、2022（令和４）年１月11日～３月９日である。

5　本文、図中の方位・国土座標は、世界測地系による。標高は、T.P（東京湾平均海抜高）である。

6　土層名及び出土遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』第24版を用いた。

7　本書の編集は、國下多美樹が担当し、実務は文化財サービス（辰巳陽一、古谷真由美、野地ますみ）が分担した。執筆は、以下の通りである。

國下多美樹：Ⅰ章、Ⅳ章

和田一希：Ⅱ章

辰巳陽一・國下多美樹：Ⅲ章－１・２

前田詞子：Ⅲ章－３

株式会社　古生態研究所（辻本裕也）：Ⅴ章－１

中塚 良（向日市埋蔵文化財センター主任）：Ⅴ章－２

8　調査に係わる図、写真、遺物の整理、報告書作成までの作業は、調査担当者の指導のもと、株式会社文化財サービスに委託して行った。うち、関連調査地位置図は和田一希、出土遺物のプレート作成は前田詞子が行った。

9　出土遺物の写真撮影は、楠華堂（内田真紀子氏）にお願いした。

10　出土資料の分析は、年代測定は株式会社古生態研究所に依頼し、地形分析の成果とともに辻本裕也・中塚 良の両氏それぞれに総括いただいた（第Ⅴ章参照）。

11　調査に係わる資料は、すべて龍谷大学文学部が保管し、一部展示に活用している。

12　調査の成果については、調査中に公表した現地説明会資料で一定の見解を示したが、整理作業を経た後の本報告書をもって正式見解とする。

13　調査・整理過程で下記の方々の有益なご助言を得た。記して感謝申し上げる（敬称略、所属は当時）。

伊野近富（八幡市教育委員会）、馬瀬智光（京都市文化財保護課）、中塚 良（向日市埋蔵文化財センター）、長宗繁一（京都市生涯学習総合センター）、西山良平（京都大学）、

本吉恵里子（龍谷大学附属平安中学校・高校）、南 孝雄（京都市埋蔵文化財研究所）、京都市文化財保護課、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、龍谷大学附属平安中学校・高等学校、株式会社竹中工務店

14　発掘調査及び整理作業に参加した方々は下記の通りである（所属は当時）。

〔発掘調査〕 前田詞子（龍谷大学院生）、宮川アンナ、川添みのり（文学部３回生）、小山千明、酒谷航平、徳永真子、廣澤公紀、和田一希（文学部２回生）、池浦里咲（文学部１回生）、辰巳陽一、田中慎一、小林一浩、吉岡創平、清須慶太（以上、株式会社文化財サービス）、作業員（株式会社京カンリ）

〔整理作業〕 前田詞子（龍谷大学院生）、和田一希（文学部２回生）、望月麻佑、早見由槻、多賀摩耶、吉川絵里、森下直子、中 優作、馬勝由紀菜、古谷眞由美、野地ますみ、神野いくみ、赤羽 香、上野恵己、甲田春奈、下市紗耶香、内牧明彦、溝川珠樹、若山美帆、西尾知子（以上、株式会社文化財サービス）

15　遺物の年代観は、主に下記文献に依拠した。

平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』（公財）京都市埋蔵文化財研究所　2019年

中世土器研究会『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995年

16　表紙カットは、鎌倉時代の軒丸瓦である。

目　次

序

例 言

Ⅰ章　調査に至る経緯と経過
1　調査に至る経緯…… 1
2　調査の経過…… 1
3　調査成果の公表等…… 3
4　報告書作成…… 3

Ⅱ章　位置と環境
1　地理的環境…… 5
2　歴史的環境…… 6
3　既往の調査…… 7

Ⅲ章　調査の成果
1　基本層序と遺構面…… 12
2　検出遺構…… 13
（1）第Ⅰ面（第2a層上面：近現代）…… 13
（2）第Ⅱａ面（第3層上面新相：中世）…… 14
（3）第Ⅱｂ面（第3層上面古相：平安時代）…… 18
3　出土遺物…… 19
（1）土器・陶磁器・瓦類…… 19
A　平安時代…… 19
B　中世…… 20
C　近世ほか…… 26
（2）木製品…… 27

Ⅳ章　まとめ
1　調査の成果と課題…… 28
2　中世京都における左京七条一坊の宅地利用…… 29

Ⅴ章　分析
1　平安京左京七条一坊十二町跡における平安時代遺構基盤堆積物の形成年代…… 39
2　京都盆地北部・平安京左京七条一坊十二町周辺の地形条件…… 49

図版目次

巻頭図版　（１）調査地上空から東を望む　（２）調査区全景（上が北）
図版１　調査区東壁土層断面図（１：80）
図版２　調査区南壁土層断面図（１：80）
図版３　調査区北壁土層断面図（１：80）
図版４　調査区下層トレンチ南壁土層断面図（１：80）
図版５　第Ⅰ面（近現代）全体平面図（１：150）
図版６　第Ⅰ面野壺051平・断面図（１：20）
図版７　第Ⅱａ面（中世）全体平面図（１：150）
図版８　第Ⅱａ面井戸112平・立・断面図（１：40）
図版９　第Ⅱａ面井戸118平・立・断面図（１：40）
図版10　第Ⅱａ面井戸123平・立・断面図（１：40）
図版11　第Ⅱａ面井戸129平・立・断面図（１：40）
図版12　第Ⅱａ面井戸148平・立・断面図（１：40）
図版13　第Ⅱａ面井戸149平・立・断面図（１：40）
図版14　第Ⅱａ面井戸154平・立・断面図（１：40）
図版15　第Ⅱａ面井戸169平・立・断面図（１：40）
図版16　第Ⅱａ面井戸176平・立・断面図（１：40）
図版17　第Ⅱｂ面（平安時代）全体平面図（１：150）
図版18　第Ⅱｂ面井戸168平・立・断面図（１：40）
図版19　出土遺物実測図－１（中世井戸　１：４）
図版20　出土遺物実測図－２（中世井戸　１：４）
図版21　出土遺物実測図－３（中世井戸・土坑　１：４）
図版22　出土遺物実測図－４（中近世・土坑ほか　１：４）
図版23　出土遺物実測図－５（井戸隅柱　１：４）
図版24　出土遺物実測図－６（井戸隅柱　１：４）
図版25　出土遺物実測図－７（井戸隅柱　１：４）
図版26　出土遺物実測図－８（木製杓　１：４）
図版27　遺構　（１）調査前（北東から）（２）調査前（南西から）
図版28　遺構　第Ⅰ面遺構掘削後全景
図版29　遺構　（１）野壺051断面（南から）（２）野壺051全景（南から）
図版30　遺構　第Ⅱａ面遺構掘削後全景
図版31　遺構　（１）井戸112全景（北東から）（２）井戸118全景（北東から）
図版32　遺構　（１）井戸118裏込め石検出状況（東から）（２）井戸123全景（南西から）
図版33　遺構　（１）井戸129全景（南西から）（２）井戸148全景（南西から）
図版34　遺構　（１）井戸149全景（南西から）（２）井戸154全景（南西から）
図版35　遺構　（１）井戸169全景（南から）（２）井戸169枠崩落状況（西から）
図版36　遺構　（１）井戸176曲物検出状況（東から）（２）井戸168全景（南東から）

図版37　遺構　第Ⅱｂ面遺構掘削後全景
図版38　遺物　（１）井戸168出土遺物　（２）井戸118出土遺物
図版39　遺物　（１）井戸123出土遺物　（２）土坑084、085、088、089、142出土遺物
図版40　遺物　（１）井戸123枠内　土師器皿　（２）井戸169枠内　土師器皿
（３）井戸169曲物内　白磁椀　（４）井戸169曲物内　白磁椀底部
（５）土坑143　鞴羽口　（６）井戸168掘方　曲物底板
図版41　遺物　（１）井戸168枠南東隅柱　（２）井戸168枠北東隅柱
（３）井戸168枠北西隅柱　（４）野壺051柄杓底板外面墨書
（５）野壺051柄杓

挿図目次

図１　調査区地区割・基準点配置図（１：400）…… 2
図２　調査経過写真 …… 4
図３　調査地位置図（１：2,500）…… 5
図４　周辺の調査地点（１：5,000）…… 10
図５　層序と遺構面の関係 …… 12

表目次

表１　調査地周辺の既往の調査一覧 …… 11
表２　遺物観察表 …… 31

Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

1　調査に至る経緯

龍谷大学は、2023年4月の心理学部開設に向け、校舎の用地を確保するために、大宮学舎西方のかつて留学生の宿舎であった大宮荘跡地で新築建物（龍谷大学附属平安中学校・高等学校体育館）を計画した。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地であり、京都市文化財保護課と埋蔵文化財の保護についての協議を重ねた。その結果、文化財保護法92条により開発による届出を行うこと、新築建物の範囲部分で試掘を行い、成果を踏まえた調査範囲と方法を決定することになった。なお、調査主体については、当大学で調査機関を設け、調査、整理、報告書作成、出土資料の保存･管理、活用まで進めることになった。

試掘調査は、2021年7月12日～13日、計画建物の東部中央に東西トレンチ2ヶ所、南北トレンチ1ヶ所、敷地北端に2ヶ所の東西トレンチが設けられ調査された。その結果、地表下約0.6m前後で現れる砂礫層上面で平安時代の遺構面を確認し、さらに下層にも以前の遺構の存在が予想された。この成果を受けて、市保護課による指導は、遺構の確認された範囲を含み、新築建物によって失われる範囲を中心に東西27m、南北15mの東西トレンチを設定して実施することになった。

なお、調査体制は以下の通りである。

調査体制

名　称	大宮荘跡地における埋蔵文化財調査委員会
委員長	玉木興慈（龍谷大学文学部長、文学部教授）
委　員	西山良平（京都大学名誉教授）
委　員	杉山 洋（龍谷大学文学部教授）
委　員	國下多美樹（龍谷大学大学院文学研究科長、文学部教授）
委　員	木許 守（龍谷大学文学部教授）
事務局	龍谷大学財務部管理課

2　調査の経過

調査は、試掘で敷地中央の遺構が確認された場所を中心にトレンチが設定された。重機によって、表土及び直下の耕作系土を除去し、以深は整地土（基本第3層）上面から人力による掘り下げに切り替え継続調査した。基本第3層上面では、黒色系の近現代層を埋土とする遺構を確認した。主に近世から現代の土地利用に関わるもので、耕作地から宅地に利用変化する状況をとらえることができた。

第1遺構面の諸遺構を掘り下げ、写真撮影を経たのち、全域を砂礫面（第4層上面）まで掘り下げたところ、ほぼ全域で円形ないし楕円形のプランが現れ、平安時代から中世の遺物を含む井戸、土坑、ピット等を確認した（第2遺構面）。鎌倉時代は、調査地の中央部で多数の井戸を確認し、居住関連の遺構が顕著に確認されない宅地利用が明らかになった。また平安時代は前期の井戸1

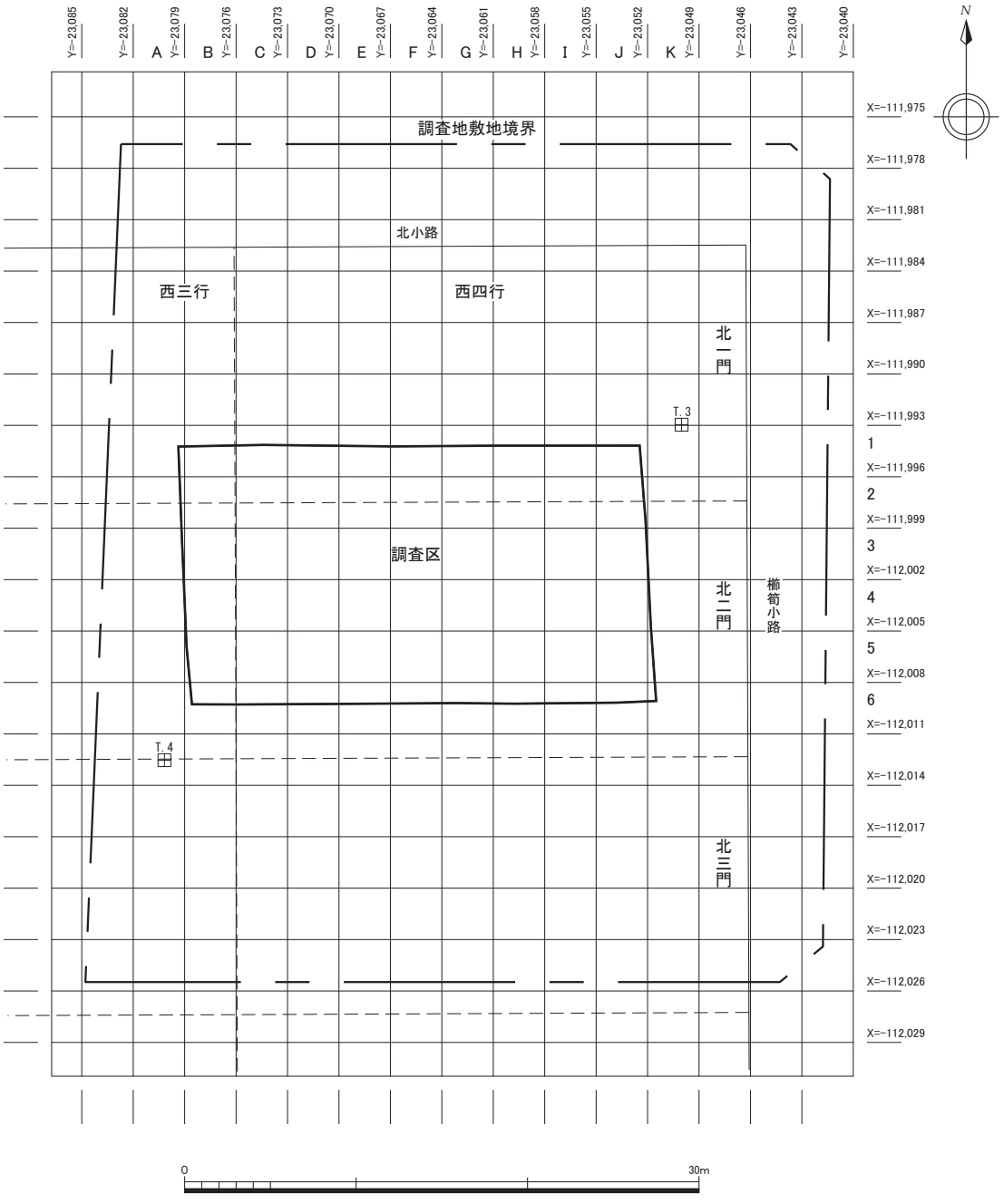


図１　調査区地区割・基準点配置図（１：400）

基のみでほとんど遺構、遺物ともに少ない状況であった。これらの遺構群の掘り下げと記録を終えた段階で下層の調査を行った。下層は、鴨川扇状地起源の砂礫層が分布していたが、堆積の構造や年代、以前の遺構の有無を確認するためにトレンチ中央に東西トレンチを設定、手掘りによって下層の調査を行った。下層トレンチでは、遺構面から 1.2 ｍまで掘り下げたが遺物が一切検出されず、地理学的分析によって全域が北東から南西に向けて堆積した扇状地であることが明確になった。年代については、砂礫中の炭化物の AMS 年代から縄文時代中期前半と判明した（分析結果参照）。

測量・地区割　測量は、街区基準点 2B062 及び 2B078 から、TS 開放トラバース測量によって敷地内に世界測地系新点 T. 3 ～ T. 4 を設定し、３ｍ方眼の地区割を行った。成果は以下の通りである。

T. 1（調査区外西方道路）	X = − 111975.545	Y = − 23184.065	H = 26.056m
T. 2（敷地北東入口）	X = − 111973.025	Y = − 23048.216	H = 26.226m
T. 3（敷地内トレンチ北東）	X = − 111992.963	Y = − 23050.019	H = 26.294m
T. 4（敷地内トレンチ外南西）	X = − 112012.536	Y = − 23080.176	H = 26.150m

3　調査成果の公表等

現地説明会　平安時代、中世の遺構の調査がほぼ完了した２月 20 日（日）、一般向けの現地説明会を実施した。緊急事態宣言が解除され落ち着きを取り戻しつつも、未だコロナ禍が続く状況であったので、公開対象は調査地周辺に限定することとして開催した。約 40 名の参加者があった。当日の現地説明会内容については、指導委員の杉山洋教授によって YouTube 公開された。また、２月 26 日（土）付、京都新聞朝刊に「鎌倉期井戸７基見つかる」という見出しで掲載された。

考古学実習　2021 年度考古学実習受講生のうち、希望者を募って２月１日から２月 28 日までの期間で発掘調査実習を行った。実習内容は、測量、遺構掘り下げを中心に行った。期間中、９名の参加者があった。

4　報告書作成

報告書作成は、調査担当者の指導のもと、出土遺物整理及び編集実務作業を文化財サービスに委託して実施した。また、一部の出土資料の整理作業は龍谷大学文学部考古学研究室で行い、その成果を報告書にまとめた。

1．調査前（北西から）

2. 重機掘削作業（北から）

3. 遺構検出作業（北東から）

4. 第Ⅱb面遺構掘削作業（南東から）

5. 大宮荘跡地における埋蔵文化財発掘調査委員会現地視察（北東から）

6. 現地説明会（北東から）

7. 埋め戻し作業（北西から）

8. 調査完了後（北西から）

図2　調査経過写真

Ⅱ章　位置と環境

1　地理的環境（図３）

本調査地は、七条通と大宮通の交差点から北西約 180 ｍに位置する。この地点は、龍谷大学旧留学生寮「大宮荘」の敷地に相当する（図３）。現地表面の標高はおよそ 26 ｍであり、鴨川扇状地に立地する。

延暦十三年（794）、平安京に遷都し宅地割がなされた。調査地は、櫛笥小路と北小路に面する左京七条一坊十二町北東部にあたると推定される。そして左京七条二坊には東市が設けられたが、その周囲には東市外町が形成された。調査地はその西側の外町のさらに西側にあたる。

調査地周辺には、かつて中･小の規模の流路があったことが知られている。その流路の在り方は、平安京形成から現在まで変遷しているらしい。『今昔物語集』二十九巻第八話「下野守為元家入強盗語　第八」に「大宮河」の記載がある[(1)]。そこには、人質に取られた女房が捨てられた後に大宮川に落ちたと書かれていることから、平安時代に大宮川があったことが確認できる。もっとも、ここに記された「大宮川」は、西大宮川にことを指すのであろう。

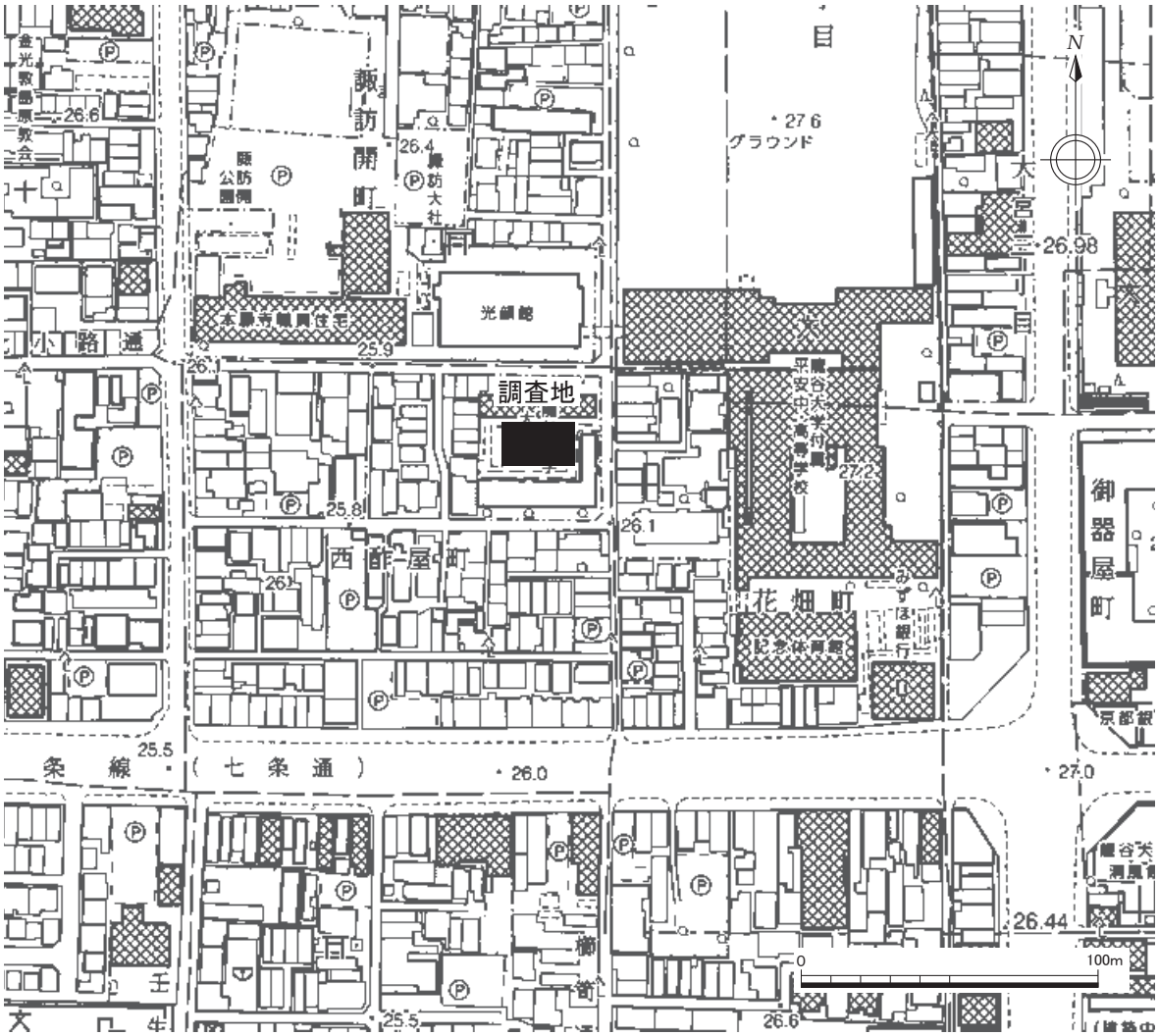


図３　調査地位置図（１：2,500）

後の資料になるが、正応五年（1292）の絵図によると大宮大路には大宮川の記載が確認できる[2]。寛永十四年（1637）の『洛中絵図』に当該地付近が描かれている。この南流する堀川から、当時六条堀川に所在した本圀寺と西本願寺の間で大宮川が分岐して西に延びている。この流路は、大宮通の西側で流れを南へ変え、大宮通に沿うように東寺の濠まで流れている様子が描かれている。

また流路に関連して、平安京以前の状況を近辺の発掘調査成果から確認すると、東寺の旧境内の調査では、北東から南西方向に流れる幅の広い流路が確認されている。さらに左京七条一坊十三町の調査では、平安京造営以前の堆積が確認され、この周辺を流れていた自然流だと考えられている。これらのことから、その年代の特定は困難な状況ではあるが、調査地周辺には、何度も流れを変えながら形成される幅の広い流路堆積があり、その後に平安京の地割が行われたことが想定される。

2　歴史的環境

左京七条一坊は東を大宮大路、西を朱雀大路、北を六条大路、南を七条大路に囲まれた坊である。調査地は平安京左京七条一坊十二町東北部に推定される。古代の宅地割制度である四行八門制では、西三・四行北一・二門に相当する。左京七条一坊付近では、古墳時代から奈良時代の遺物散布地である堂ノ口遺跡以外、特に平安時代以前の遺跡は周知されていない。

しかし、調査地東方の龍谷大学大宮学舎西黌・清和館の改築・新築の際に行われた発掘調査では、布留式期の甕形土器が出土している。この時には遺構が検出されていないため明確ではなかったが、同東黌の新築工事に伴う事前調査では土坑に伴って庄内式期の二重口縁壺が出土した。わずかな資料ではあるが、これらのことからこの近辺には古墳時代前期の集落が存在したと想定できる。

一方平安時代では、調査地の西方に鴻臚館があった。鴻臚館は左京、右京それぞれの七条一坊三・四町に所在しており、外国の使節を接待するために設けられた。承和六年（839）に東鴻臚館は廃止され西鴻臚館のみが残ることになる（『続日本後紀』同年八月一二日条）。鴻臚館廃止後は、典薬寮の御薬園がつくられた。

また南方には西八条第が所在した。平家一門が、左京八条一坊内に複数の邸宅を構えた。そのうち十一町には「八条櫛笥亭」が所在し、当初は清盛亭となっていた。

さらに七条大路を舞台とする稲荷祭が執り行われたことがわかっている。『小記目録』によると、寛弘三年（1006）には、すでに稲荷祭が催行されていたとの記録がある。

以上のように調査地周辺の状況は一定程度明らかになっているが、調査地が所在する平安時代における十二町の資料は残っておらず、その様相は知られていない。また鎌倉時代以降についても様相が不分明であるが洛中絵図によると、調査地周辺は畑地であったと記載されている。十七世紀初頭には調査地周辺が畑地であり、昭和まで畑地として土地利用がされてきた。

3　既往の調査（図４、表１）

左京七条一坊における発掘調査事例は多くなく、充実していない。そこで七条一坊とその周辺の発掘調査をまとめておく。

調査地点 16 は、学校法人平安学園体育館新築に伴う発掘調査である。平安時代の井戸や柱穴、中世の井戸などが検出されている。

調査地点 19 は、学校法人平安学園校舎増築工事に伴う発掘調査である。平安時代後期の井戸・溝が検出されているが、中世以降の削平により東市関連の遺構は認められていない。

調査地点 20 は、学校法人平安学園平安中・高等学校 110 記念体育館建築工事に伴う発掘調査である。平安時代前期の井戸、平安時代～室町時代の西二行と西三行を区切る溝が検出されている。特筆される遺物として、平安時代の井戸から出土した籠編物・水晶玉がある。

調査地点 17 は、未報告だが、平安時代前期の井戸を検出している。

調査地点 22 は、龍谷大学大宮学舎西黌・清和館の改築・新築に伴う発掘調査で、平安時代の井戸のみが検出された。

調査地点 14 は、未報告だが、平安時代中期の溝と平安時代後期～鎌倉時代の井戸を検出している。

調査地点 24 は、龍谷大学大宮学舎東黌の改築に伴う発掘調査で、古墳時代～平安前期の柱穴、井戸や溝など、鎌倉時代の柱穴、礎石列、溝や井戸など、南北朝～室町時代の柱穴、溝や井戸など、安土桃山時代～江戸時代の柱穴、礎石、溝や井戸などが検出された。

調査地点 25 は、七条通市電撤去後の上下水道管設置に伴う発掘調査である。櫛笥小路の交差点にあたるトレンチでは平安時代後期の七条大路北側溝が検出された。

調査地点 26 は、八条一坊八町跡の調査である。鎌倉時代前期～室町時代前期の柱穴や井戸、溝などが検出された。

調査地点 27 は、八条一坊十六町跡の調査である。平安時代末期から鎌倉時代にかけての井戸、鎌倉時代から室町時代にかけての柱穴群、井戸などが検出している。

註

（１）大宮川については、下記の文献を参考にした。
角田文衛総監修『平安京提要』（古代学協会・古代学研究所編）　角川書店　1994 年
安藤哲郎「平安貴族の大路・小路をめぐる空間意識ー歴史地理からみる平安京の空間」『平安京の地域形成』（西山亮平・鈴木久男・藤田勝也編）京都大学学術出版会　2016 年

（２）西山亮平・鈴木久男・藤田勝也『平安京の地域形成』京都大学学術出版会　2016 年

【参考文献】

［報告書一覧］

（１）「平安京左京六条一坊二町」『昭和 52 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011 年

（2）「平安京左京六条一坊七町跡」 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2017 年
（3）「平安京左京六条一坊」『平成２年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1994 年
（4）「左京六条二坊」『昭和 56 年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1983 年
（5）「平安京左京六条一坊六町」『昭和 54 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011 年
（6）「平安京左京六条二坊六町」『平安京跡研究調査報告第 17 輯』 古代学協会　1986 年
（7）「平安京左京六条二坊五町・猪熊殿跡・本圀寺跡」『昭和 54 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2012 年
（8）「平安京左京六条一坊五町」『昭和 55 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011 年
（9）「平安京左京七条一坊」『平成 12 年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2003 年
（10）「平安京左京七条二坊・本圀寺跡」『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996 年
（11）『本願寺境内発掘調査概要』 本願寺境内学術調査会　1983 年　未報告
（12）「史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊七町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2008 年　未報告
（13）「史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊七町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2008 年　未報告
（14）「史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊六町（東市）跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2007 年
（15）「平安京東市周辺の調査―左京七条一坊十一町―」『平安学園教育研究会研究論集　44』 平安学園教育研究会　2003 年
（16）平安京調査会　1976 年　未報告
（17）「平安京左京七条一坊十三・十四町の調査」『平安学園教育研究会研究論集　41』 平安学園平安京跡遺跡調査委員会　1998 年
（18）「左京七条一坊」『昭和 56 年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1983 年
（19）『平安京東市外町の調査―平安京左京七条一坊十三町―』平安学園考古学クラブ編　平安学園平安中・高等学校　1986 年
（20）『平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2009 年
（21）『龍谷大学構内発掘調査報告書―大宮学舎西黌・清和館建設に伴う事前調査―』 龍谷大学校地学術調査委員会　1980 年
（22）『重要文化財　龍谷大学正門―解体修理にともなう事前発掘調査報告書』 龍谷大学校地学術調査委員会　1977 年
（23）『平安京跡左京七条二坊五町（東市跡）発掘調査報告書』 学校法人龍谷大学　2018 年
（24）「平安京左京七条一・二坊、東市跡」『昭和 52 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2011 年

(25)『平安京左京八条一坊八町跡』 国際文化財株式会社 2021 年
(26)『平安京左京八条一坊十六町跡』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014 年
(27)『平安京跡発掘調査報告左京八条一坊十六町』 関西文化財調査委員会 2004 年
(28)『平安京左京八条二坊一町(東市外町)発掘調査報告書―龍谷大学大宮学舎清風館建設に伴う調査―』学校法人龍谷大学 2009 年
(29) 平安京調査会 1976 年 未報告
(30)『平安京左京八条二坊一町(東市外町)発掘調査報告書―龍谷大学大宮学舎白亜館建設に伴う発掘調査―』 学校法人龍谷大学 2011 年
(31)『平安京左京八条二坊三町跡』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006 年

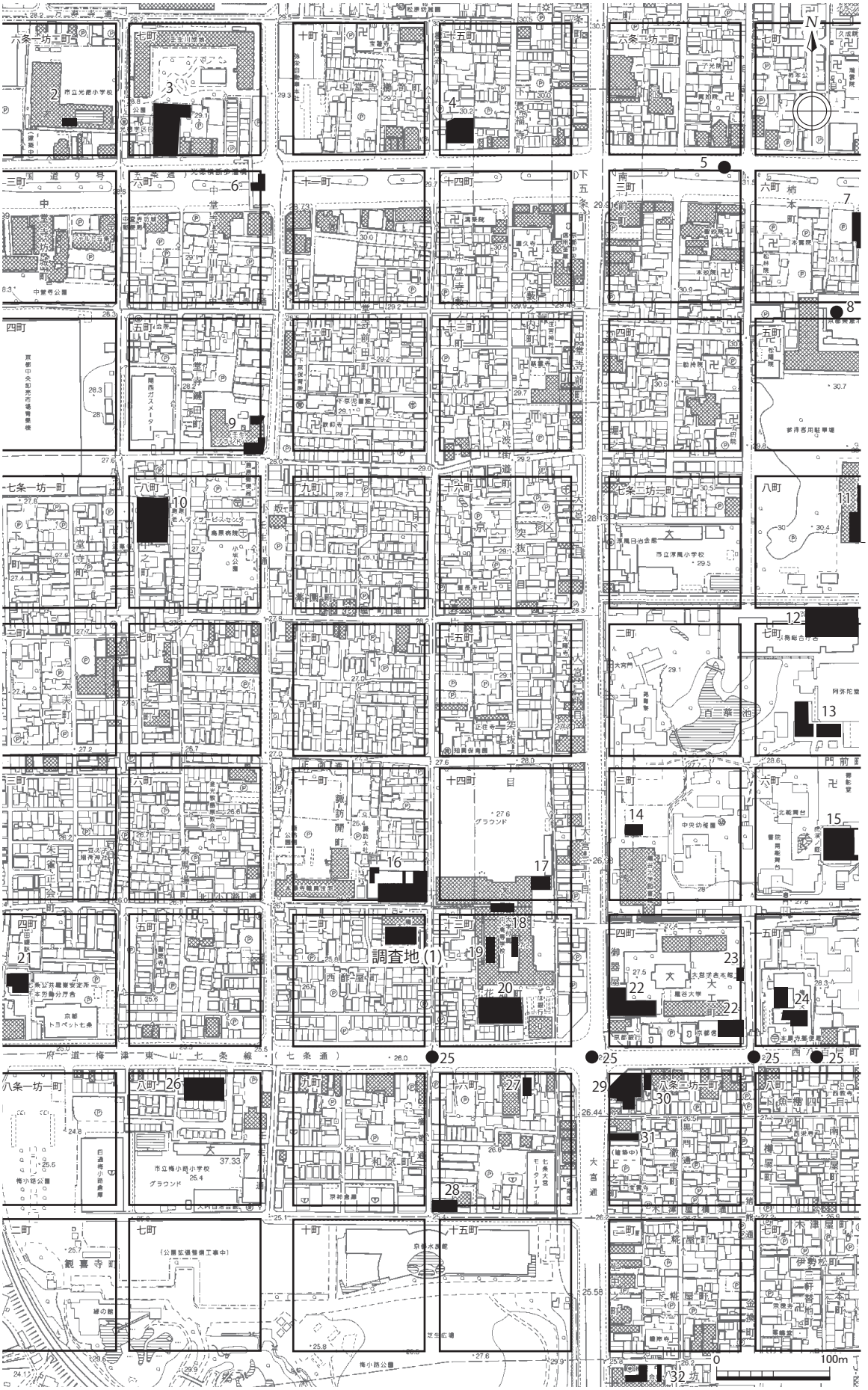


図４　周辺の調査地点（１：5,000）

表１　調査地周辺の既往の調査一覧

番号	条坊	調査概要	文献
1	左京七条一坊十二町（本調査地）	平安時代前期の井戸、鎌倉時代の井戸、土坑、近現代の井戸、溝	本冊
2	左京六条一坊二町	鎌倉時代の井戸・溝	1
3	左京六条一坊七町	鎌倉時代～室町時代の土坑・ピット、江戸時代の土取り穴	2
4	左京六条一坊十五町	古墳時代の流路、平安時代の掘立柱建物・柵・井戸、鎌倉時代～室町時代の柱穴・井戸・土坑	3
5	左京六条二坊三・六町	平安時代の建物、平安時代～桃山時代の柱穴・土坑、室町時代から桃山時代の濠	4
6	左京六条一坊六町	鎌倉時代～室町時代の井戸、江戸時代の土取り穴	5
7	左京六条二坊六町	平安時代の井戸・鎌倉時代の井戸・土坑・柱穴・墓、室町時代の井戸・土坑・掘立柱建物・溝、室町時代以前の溝、室町時代以降のピット群、江戸時代の井戸・柱穴列・土取り坑・掘込・溝	6
8	左京六条二坊五町	平安時代中期の掘立柱建物・方形柱穴列、平安時代後期～鎌倉時代の井戸、平安時代以前～中世の柱穴・土坑・溝、室町時代末期の溝、中世から近世の井戸・柱穴・土坑・溝、近世以降の井戸・柵・礎石建物・柱穴・土坑・土蔵基礎・舟入・溝	7
9	左京六条一坊五町	江戸時代の土取り穴	8
10	左京七条一坊八町	弥生時代前期の包含層、江戸時代以降の井戸・柱穴・土坑・溝	9
11	左京七条二坊八町	平安時代の包含層、平安時代前期の土坑、平安時代中期の井戸・土坑、平安時代末期～鎌倉時代前期の井戸・柱穴・土坑・溝、鎌倉時代後期～室町時代初頭の柱穴・土坑・溝、室町時代の井戸・整地層・柱穴・土坑・堀・溝、江戸時代の井戸・土坑・掘状遺構	10
12	左京七条二坊七町、左女牛小路	自然流路など	11
13	左京七条二坊七町	平安時代前期中頃の土坑、平安時代前期の建物、平安時代～鎌倉時代の井戸・土坑・溝、室町時代後期～安土桃山時代の溝、安土桃山時代以前の井戸	12
14	左京七条二坊三町	平安時代中期の溝、平安時代後期～鎌倉時代の井戸、江戸時代の井戸・土坑・建物など	13
15	左京七条二坊六町	平安時代末期～鎌倉時代の土坑・溝、室町時代の井戸、安土桃山時代末期～江戸時代前期の柱穴・土坑、江戸時代中期～江戸時代後期の井戸・瓦列・建物・土坑	14
16	左京七条一坊十一町	平安京造営以前の自然流路、平安時代前期の井戸、平安時代の井戸・柱穴、中世の井戸・土坑、江戸時代後半から明治初期の耕作土層、近世の井戸・柱穴・土坑	15
17	左京七条一坊十四町	平安時代前期の井戸、鎌倉時代～室町時代の井戸	16
18	左京七条一坊十三町・十四町	近世～近代の耕作土	17
19	左京七条一坊十三町	流路、平安時代後期の井戸・溝、鎌倉時代の井戸、室町時代の井戸、土坑、溝、近世の耕土層	18
20	左京七条一坊十三町	平安時代前期の井戸、鎌倉時代前半の井戸、室町時代後期の井戸、室町時代後期～安土桃山時代の溝、江戸時代の溝・井戸・建物、江戸時代末期～明治の耕作土層	19
21	左京七条一坊四町	弥生時代の溝・土坑、平安時代～鎌倉時代の柱穴・井戸・土坑・溝、安土桃山時代の盛土層、江戸時代の土坑	20
22	左京七条二坊六町	平安時代後期の井戸、室町時代の井戸、江戸時代の瓦溜	21
23	左京七条二坊四町	近世の瓦溜・礎石・土坑	22
24	左京七条二坊五町	古墳時代～平安時代前期の柱穴・土坑・井戸・溝、鎌倉時代の柱穴・礎石列・溝・井戸・土坑、南北朝～室町時代の柱穴・溝・井戸・土坑、安土・桃山時代～江戸時代初期の土坑・柱穴・溝・池、江戸時代の柱穴・礎石・溝・井戸・土坑、幕末～明治時代の柱穴・溝・井戸・土坑・池	23
25	七条一坊・二坊、七条大路	鎌倉時代～室町時代の溝、室町時代以降の溝、江戸時代の櫓、近世の井戸・土坑、近世の埋甕・溝	24
26	左京八条一坊八町	鎌倉時代～室町時代の溝・柱穴・井戸・土坑、江戸時代以降の遺構	26
27	左京八条一坊十六町	平安時代末期～鎌倉時代初期の井戸・整地層・土坑、鎌倉時代の井戸・柱穴群・土坑・埋甕、安土桃山時代～江戸時代初期の落込・土坑、江戸時代の石垣痕跡・井戸・杭跡・整地層・土坑・根石	27
28	左京八条一坊十六町	平安時代前期の井戸・柱穴・土坑、平安時代後期の柱穴・土坑、鎌倉時代～室町時代の石敷き遺構・井戸・整地層・柱穴・土坑・埋甕・溝・炉、近世以降～近代の井戸・土坑・櫓・溝	28
29	左京八条二坊一町	平安時代前期の井戸、平安時代後期～鎌倉時代の井戸・礎石建物・土坑・埋甕・溝、室町時代の井戸・土坑、江戸時代後期～明治時代の井戸・鋳造抗・溶解炉基礎	29
30	左京八条二坊一町	平安時代後期の土坑、鎌倉時代～室町時代の建物・土坑	30
31	左京八条二坊一町	平安時代前期の井戸・柵列・ピット群、平安時代～中世の整地跡・土取痕・ピット群・溝跡、中世末期～近世の整地跡・土坑・ピット群・溝、近世末期～近代初頭の土坑・廃棄土坑・炉	31
32	左京八条二坊三町	安土桃山時代末期の柱穴、江戸時代初期の耕作土層、江戸時代の礎石・土坑・土間・溝・礫面、江戸時代後期～近代の瓦溜・瓦列・土坑・埋納土坑	32

Ⅲ章　調査の成果

1　基本層序と遺構面（図版１～４）

調査地における現地表面の標高は、調査区北西部で 26.08 m、北東部で 26.20 m、南西部で 25.96 m、南東部で 25.97 mを測り、北東から南西へと向かって下がる地形を呈する。現地表下 0.1 m～ 0.5 mは近現代の盛土層で、調査区全域に分布する。基本層序は、当該盛土層以深を大きく第１～３層に区分し、第１層および第２層はさらに各々２層に細分した。

第 1a 層（近現代層）

黒褐色系細砂からなる近現代層である。焼土含み層相から整地土と推定される。層厚は 0.1 m～ 0.2 mである。近現代盛土とともに重機により掘り下げた。

第 1b 層（近現代耕作土）

黒褐色シルト～細砂からなる近現代耕作土層で、その層厚は 6.0 ㎝～ 9.1 ㎝である。ただし、この耕作土層は調査区全面で確認されたものではなく、主に調査区南西部に分布する。当層についても、近現代盛土と共に重機により掘り下げた。

第２a 層（中世遺物包含層）

黄褐色粗砂を基質として、第３層に由来すると考えられる灰黄褐色シルトが斑文状に混じる層で、中世の遺物を包含する。第１層を除去した時点で第３層とともに露出した堆積層であり、遺構状の輪郭を伴って検出された。そのため、遺構として掘削を行った。

第 2b 層（中世遺物包含層）

第２a 層の類似層であるが、当該層に比して第３層由来の灰黄褐色シルトを含む割合が高い層で細分した。中世の遺物を包含する。

第３層（平安時代以前の扇状地堆積物）

褐色系シルト～細砂からなる扇状地堆積物である。調査地における基盤層である。調査では、当層上面を遺構面として設定し、近現代、中世～近世、平安時代前期の遺構を検出した。第３層は、トレンチ中央で下層トレンチを設定し手掘りして遺物の採取に努めたが出土しなかった。層相からみて北東から南西向きの扇状地堆積物と見られる。第３層の形成年代は、上面で検出した井戸から

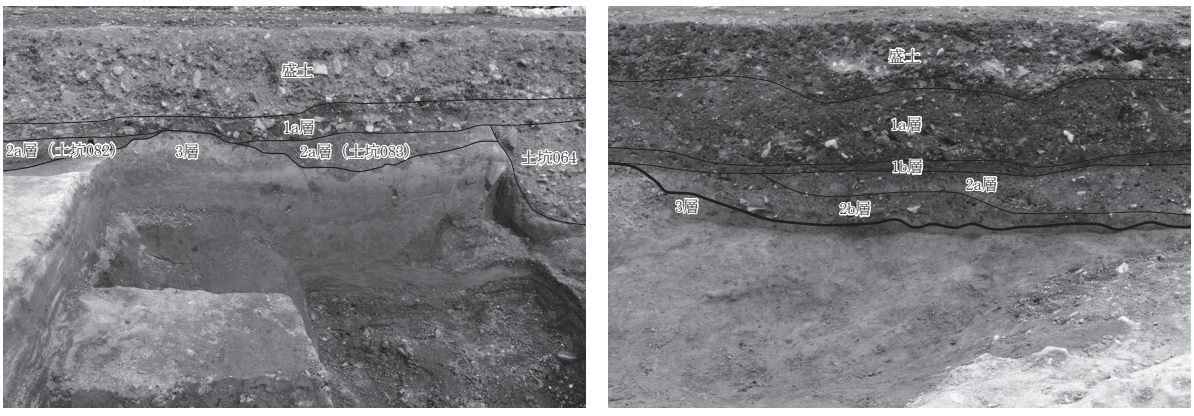


図５　層序と遺構面の関係

平安時代前期が下限となるが、調査地の東方、左京七条二坊一帯の過去の調査では古墳時代前期の遺構、遺物を確認しており、古墳時代前期以前の堆積と推測されていた。今回の調査地点では分析によって、縄文時代中期前半の堆積物であることが判明した。

遺構面

時期毎に第Ⅰ面（近現代、第２a 層上面）、第Ⅱａ面（第３層上面新段階）、第Ⅱｂ面（第３層上面古段階）を設定し、遺構掘削および記録作業を行った。

２　検出遺構

（１）第Ⅰ面（第２a 層：近現代、図版５）

第Ⅰ面では、近現代整地土および盛土直下の近現代耕作土層上面から切り込まれたと考えられる耕作溝と、それらに伴うと考えられる野壺１基を主な遺構として検出した。

〔溝〕

検出された溝は東西方向のものが４条（溝 023 ～ 025･042）、南北方向のものが１条（溝 027）である。幅 0.19 ｍ～ 0.39 ｍ、検出長 1.38 ｍ～ 3.63 ｍ、検出面から遺構底部までの深さ 2.0 ㎝～ 4.0 ㎝を測る。耕作に伴う鋤溝であろう。

〔野壺 051〕（図版６・写真図版２）

調査区のほぼ中央部で検出した、平面円形を呈する漆喰貼りの野壺で、底面にも漆喰が貼られていた。外寸は東西 1.94 ｍ、南北 1.99 ｍで楕円形の平面形を呈し、漆喰の厚みは約 4.0 ㎝～ 14 ㎝と一定していない。検出面から底部までの深さは 0.7 ｍである。また、漆喰製の枠外周に掘方が確認できなかったことから、事前に掘り込んだ掘方に沿って漆喰を貼り付け、枠を構築したものと考えられる。埋土は、上下２層に分けられ、上層が褐灰色～赤褐色系細粒砂、下層が粘性のある黒色極細～細粒砂である。下層は遺物を含まないが層相と堆積状況から機能時の堆積と推定される。上層は多量の近現代遺物ともに破砕された漆喰片を含んでおり、廃絶時の埋め戻し土とみられる。

漆喰製であることから早くとも幕末以降に構築され、遺構内部に近現代の塵芥が多量に充填されていたことから、昭和期まで機能していた可能性が考えられる。

〔土坑〕

土坑 143

調査区北西隅部で検出した。平面規模は東西 3.3 ｍ以上、南北 4.3 ｍ以上、検出面から遺構底部までの深さは 0.12 ｍである。東を攪乱に切られ、北は調査区外へと延長するため、全体規模は不明である。整地に類する遺構と考えられる。近世の遺物が出土している。

土坑 144

土坑 143 の西隣で検出した、平面Ｌ字形を呈する遺構である。南北部分の東西幅 1.9 ｍ、東西部分の東西幅 2.1 ｍ、南北長 2.7 ｍ以上、検出面から遺構底部までの深さは 0.2 ｍである。北が調査区外へ延長するため、全体規模は不明である。土坑 143 同様、整地に類する遺構と考えられる。近世の遺物が出土している。

（２）第Ⅱａ面（第３層上面新相：中世、図版７）

第Ⅱａ面では、主に溝、土坑、整地遺構と井戸を検出した。溝は南北方向のものと東西方向のものが検出され、南北方向のものは調査区西部に集中し、東西方向のものは調査区東部で検出された。土坑は平面形が不定形で比較的深いことから土取り穴跡と考えられるもの、平面規模が大きく、比較的浅いことから整地に類すると考えられるものとに大別される。土取り跡と考えられる土坑は調査区東半部、整地状土坑は調査区北西部、東西中央南半部、南東部に分布する。井戸は全９基検出され、調査区の東西中央部に集中する。

〔溝〕

南北方向のものが５条（溝 072・074・081・087・162）、東西方向のものが２条（溝 174・176）検出された。幅 0.2 ｍ～ 0.4 ｍ、検出長 0.9 ｍ～ 4.1 ｍで、検出面から遺構底部までの深さは 3.0 ㎝～ 0.1 ｍである。南北溝は調査区西部にまとまり、北東－南西方位に走行する。耕作に伴う鋤溝ないし排水目的の暗渠であろう。

〔土坑〕

土坑 140

調査区北東隅部で検出した。平面規模は南北 2.3 ｍ、東西 1.77 ｍの不定形なプランを呈し、検出面から遺構底部までの深さは 0.15 ｍ～ 0.33 ｍを測る。底面は凹凸を伴い、土取り穴跡と考えられる。鎌倉時代前期の遺物が出土している。

土坑 142

調査区北西部の土坑 158 直下で検出した。西部および南部の大半を攪乱によって切られるため、全体規模は不明である。東西 1.6 ｍ、南北 2.2 ｍ分を検出し、検出面から遺構底部までの深さは 0.15 ｍ～ 0.25 ｍを測る。土取り穴跡と考えられる。

土坑 145

調査区中央部で検出した。平面規模は東西 2.4 ｍ、南北 1.5 ｍ、検出面から遺構底部までの深さは 0.3 ｍである。西に隣接する土坑 146 を切る。土取り穴跡と考えられる。鎌倉時代前期の遺物が出土している。

土坑 146

土坑 145 の西に隣接する。東西 0.6 m、南北 1.6 m、検出面から遺構底部までの深さは 0.13 mである。東の一部を土坑 145 に切られる。土取り穴跡と考えられる。

土坑 147

土坑 146 の西に隣接する。東西 0.8 m、南北 1.9 m、検出面から遺構底部までの深さは 9.0 ㎝である。東の一部を土坑 146 に切られる。土取り穴跡と考えられる。

土坑 157

調査区南北中央部東壁際で検出した、楕円形平面を呈する土坑であるが、大半を上層遺構の土坑 064 によって切られている。南北 1.8 m、東西 2.3 m以上、検出面から遺構底部までの深さは 0.7 m である。遺構の東辺は調査区外へ延長するため、全体規模は不明である。土取り穴跡と考えられる。

土坑 158

調査区北西部で検出した、東西 2.9 m、南北 2.9 mの方形平面を呈する遺構で、検出面から遺構底部までの深さは 3.0 ㎝～ 7.0 ㎝である。西辺および南辺の大半を攪乱によって切られる。平面形が整っており、蔵等の建物に伴う底面の整地の可能性が考えられる。

土坑 159

調査区北西部で検出した、東西 0.8 m、南北 0.8 mの方形平面を呈する遺構で、検出面から遺構底部までの深さは 0.25 mである。土坑 158 直下で検出したが、両遺構の埋土に差異は無く、同時に埋没したと考えられる。

土坑 167

土坑 143 の南東部で検出した。西辺および北部を攪乱に切られるため、全体規模は不明であるが、東西 3.7 m、南北 0.9 m以上の方形平面を呈し、検出面から遺構底部までの深さは 3.0 ㎝～ 0.14 mである。整地に類する遺構と考えられる。

土坑 175

調査区北西角部で検出した。東西 3.8 m、南北 0.8 mにわたって検出したが、西部および北部が調査区外へ延長するため、全体規模は不明である。検出面から遺構底部までの深さは 0.33 mである。土坑 144 を切るが、両遺構の埋土に差異は無く、同時期に埋没したと考えられる。埋土は黒褐色細砂である。

その他、不整形で浅い土坑が多数あるが性格は不明である。

〔整地〕

整地 150

調査区東西中央南半部で検出した。北東から南西へ向かって伸びる遺構で、東西幅 0.5 m～4.7 m、検出長は南北 6.0 mであるが、南辺が調査区外へ延長するため、全体規模は不明である。検出面から遺構底部までの深さは 0.13 m～ 0.34 mで、井戸 149 が当遺構の上から掘り込まれていることから、井戸 149 構築時かそれ以前の整地に類する遺構と考えられる。平安時代末～鎌倉時代前期の遺物が出土している。

整地 172

調査区南東部で検出した、北東から南西へ向かって伸びる遺構である。東西幅 0.3 m～ 6.5 m、検出長南北 8.3 m、検出面から遺構底部までの深さは 5.0 ㎝～ 0.1 mと浅く、土坑 150 と同様、整地に類する遺構と考えられる。

〔井戸〕

井戸 112（図版８・写真図版４）

調査区東西中央東寄りの北壁近くで検出した。掘方の平面形は東西 2.1 m、南北 2.1 mの方形で、検出面から遺構底部までの深さは約 1.3 mである。枠は掘方中央から北よりに位置する。平面プランは一辺約 1.0 mの方形と推測されるが、枠材の一部が東辺および南辺に僅かに残存しているのみの状況であったため、構造については不明である。枠内の埋土は黄褐色系砂泥、掘方の埋土は、にぶい黄褐色を呈する細砂・砂泥である。枠内底面の標高は 24.24 m。鎌倉時代前期の土器類が出土した。

井戸 118（図版９・写真図版５、６）

井戸 112 の南西部で検出した。掘方の平面形は東西 2.1 m、南北 2.2 mの方形で、掘方検出面から遺構底部までの深さは約 1.3 mである。井戸 169 および井戸 176 を切る。枠は掘方中央から東にずれて構築されている。平面プランは東西 0.9 m、南北 0.8 mの方形で、その構造は縦板組横桟留型、横桟の保持構造は支柱と考えられる。枠の裏込めには西辺にのみ人頭大の礫が多量に混入しており、西に隣接する井戸 169 の枠材に接していた。これは、当井戸を構築する際に井戸 169 の掘方を破壊したことによって、当該井戸の枠が倒れ込んでくることを防止するための措置であったと考えられる。また、遺構底部から、方形枠から西へ約 0.3 mずれた位置で直径約 0.5 mの曲物が検出され、残存高は 7.0 ㎝であった。このことから、当井戸にほぼ重なる状態でもう一基の井戸（井戸 176）が存在していたと考えられるが、掘方は当井戸および井戸 169 によって破壊され、残存していなかった。枠内の埋土は灰黄色・オリーブ褐色系の砂泥、掘方の埋土は、上位が褐色系、下位が灰黄色系砂泥である。枠内底面の標高は 24.6 mである。鎌倉時代前期の土器類が出土した。

井戸 123（図版 10・写真図版 7）

調査区東西中央南壁近くで検出した。掘方の平面形は東西 2.8 m、南北 3.0 mの方形で、検出面から遺構底部までの深さは 1.4 mである。枠は一辺 0.8 mの方形で、掘方中心からやや北西にずれた位置に構築されている。枠構造は縦板組横桟留型と考えられるが、横桟は確認できていないため保持構造については不明である。枠内の埋土は、底面近くが黄褐色砂泥、上位から中位がにぶい黄褐色・褐色系砂泥である。枠内底面の標高は 24.15 mである。鎌倉時代前期の土器、輸入陶磁器、軒丸瓦が出土した。

井戸 129（図版 11・写真図版 8）

調査区中央西寄りで検出した。掘方の平面形は東西 2.2 m、南北 2.3 mの方形で、検出面から遺構底部までの深さは 1.0 mである。枠板は北辺、西辺、東辺で一部残存する。一辺 1.0 mの方形で、構造は縦板組横桟留型であるが、横桟の保持構造については不明である。方形枠直下に水溜用と考えられる直径 0.4 mの曲物が据えられており、高さは 0.1 mである。枠内の埋土は、褐灰色極細砂である。枠内底面の標高は 24.5 mである。鎌倉時代の土器が出土した。

井戸 148（図版 12・写真図版 9）

井戸 129 の北西に位置する。掘方の平面形は東西 1.9 m、南北 1.9 mの方形で、検出面から遺構底部までの深さは 1.6 mである。枠は一辺 0.8 mの方形で、掘方中央からやや南東にずれた位置に構築されている。枠構造は縦板組横桟留型であるが、横桟の保持構造については不明である。方形枠直下に水溜用と考えられる曲物が二段に据えられていた。上段のものは直径約 0.5 m、残存高約 0.36 m、下段のものは高さ 0.15 mを測る。枠内の埋土は、上位の縦板組み内でにぶい黄橙色・褐灰色極細砂、下位の曲物内で褐灰色極細砂・暗褐色粘土、掘方の埋土は褐色系細砂である。枠内底面の標高は 24.4 mである。鎌倉時代前期の遺物が出土している。

井戸 149（図版 13・写真図版 10）

井戸 129 の南東に位置し、土坑 150 を切る。掘方の平面形は東西 2.1 m、南北 2.0 mの方形で、検出面から遺構底部までの深さは 1.0 mである。枠は北辺と東西辺の縦板が部分的に残る。うち、北辺のみ縦板基部が完存し、幅 26 ㎝の板を並べられ横桟の棒材が残存していた。東西 1.0 m、南北 1.1 mの方形で、その構造は縦板組横桟留型である。枠内の埋土は、上位がにぶい黄褐色砂泥、下位が暗黄灰色粘土である。枠内底面の標高は 24.3 mである。

井戸 154（図版 14・写真図版 11）

井戸 129、148 の北東に位置する。掘方の平面形は一辺 1.8 mの方形であるが、南辺中央部がやや突出して不定形な形状を呈する。検出面から遺構底部までの深さは 0.9 mである。枠は掘方中央からやや南東に位置し、平面プランは東西 0.87 m、南北 0.9 mの方形である。枠材は北辺と西辺の一

部が残存しているのみであったため、構造は不明である。枠内の埋土は黄褐色系砂泥、掘方の埋土は褐色系砂泥である。枠内底面の標高は 24.7 mである。

井戸 169（図版 15・写真図版 12）

井戸 118 の西に隣接し、東半を 118 に切られるため、掘方の全体規模は不明である。検出した掘方の平面規模は東西 1.5 m以上、南北 2.2 m、検出面から遺構底部までの深さは 1.4 mである。枠は円形縦板組無支持構造であるが、北半が南に倒れ込み、半円形になった状態で検出された。枠直径は 0.8 m前後と推定される。今調査で検出した井戸で、平面円形を呈する枠を有するものは当遺構のみであった。枠内の埋土は、褐色系砂泥、掘方は黄褐色･褐色系砂泥である。枠内底面の標高は、24.20 mである。鎌倉時代前期の土器、墨書土器が出土した。

井戸 176（図版 16・写真図版６）

井戸 118 の直下に位置する。掘方は井戸 118 および井戸 169 によって破壊されており、底部に曲物の痕跡のみが残存している状態で検出された。曲物の直径は約 0.5 m、残存高は 7.0 ㎝である。井筒内の埋土は黒褐色細砂である。枠内底面の標高は 24.22 mである。

（３）第Ⅱｂ面（第３層上面古相、平安時代、図 17）

平安時代前期の井戸１基を検出した。

〔井戸〕

井戸 168（図版 18・写真図版 14）

調査区南東隅部で検出した。遺構南部が調査区外になるため、掘方の全体規模は不明であるが、東西 2.6 m、南北 1.9 m以上、掘方検出面から遺構底部までの深さは 0.7 mを測る。枠は掘方の西寄りで検出され、一辺 1.1 mを測る方形横板組隅柱構造で、残存高 0.35 mである。枠材の残存状況は、今調査において検出された井戸のなかで最も良好であった。枠内の埋土は、黒褐色・暗灰黄色砂泥で、掘方の埋土は、褐色・灰色系細砂、上面はオリーブ灰色系砂泥である。枠内底面の標高は 24.64 mである。平安時代前期の須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、土馬、平瓦が出土した。

3　出土遺物（図版 19 ～ 26）

平安時代～近代の遺物がコンテナ 28 箱出土した。うち近世末以前の遺物を報告対象とした。鎌倉時代の土器類が主体を占める。

種類別の内容は下記の通りである。

（平安時代）　土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、土製品、瓦製品、石製品

（鎌倉時代）　土師器、須恵器、瓦器、灰釉陶器、緑釉陶器、褐釉陶器、焼締陶器、青磁、白磁、土製品、木製品

（近世～近代）陶磁器、ガラス製品、瓦製品、石製品、木製品

以下、時代の古い資料から詳細を述べる。なお、主な土器、陶磁器類の器形、技法、分類、年代は下記の文献に依拠した。

土師器は、平尾政幸「京都の土師器再考」『洛史　研究紀要　第 12 号』京都市埋蔵文化財研究所 2019 年、緑釉陶器は、高橋照彦「緑釉陶器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995 年、瓦器は、鋤柄俊夫「瓦質土器（各地の瓦質土器）」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995 年、磁器は、太宰府市教育委員会「大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－」『太宰府市の文化財』第 49 集 2000 年を参照した。

（1）土器・陶磁器・瓦類（図版 19 ～ 22・38 ～ 40）

A　平安時代（図版 19・38）

井戸 168（1 ～ 27）　掘方（1 ～ 6）、井戸枠内（7 ～ 12）、掘方上面（13 ～ 27）に分けられる。

掘方出土の（1 ～ 6）は、須恵器（1 ・ 2）、緑釉陶器（3 ～ 6）である。

須恵器（1）は杯の底部である。高台は底部の外側寄りに貼り付けられる。（2）は壺の肩部である。外面に灰白色の自然釉がかかる。

緑釉陶器（3 ～ 6）は椀である。いずれも削り出し円盤状高台を有するもの。（3）は淡黄色のツヤのない釉が薄くかかる。（4）は浅黄色のややツヤのある釉が全面に薄くかかる。（5）は釉がほとんど剥がれたもの。本調査で出土した緑釉陶器の中では最も厚手の底部である。（6）は全形がわかるもの。体部は内湾し、口縁端部は少し外反して丸くおさめる。浅黄色のツヤのある釉を全面に施す。高橋分類 A 類にあたる。

枠内出土の（7 ～ 12）は、土師器（7）、須恵器（8 ・ 9）、緑釉陶器（10 ～ 12）である。

土師器（7）は皿の口縁部である。口縁部がやや肥厚するもの。

須恵器（8）は甕の口縁部である。口縁端部は下方に拡張し、外傾する平坦面を持つもの。口縁部内面に灰白色の自然釉がかかる。断面は赤褐色を呈する。（9）は壺の底部である。厚手の底部に低い高台が貼り付く。

緑釉陶器（10 ～ 12）は椀の底部である。すべて削り出しの円盤状高台を有する。（10）は見込みにトチン痕が 1 箇所残るもの。（11）は高台がやや低いもの。（10・11）の釉調は黄味がかった淡い

緑色で、全面に薄く施釉される。（12）は高台外面の周縁のみ施釉されない。釉調はツヤのある浅黄色で、薄くかかる。

掘方上面出土の（13 ～ 27）は、土師器（13・14）、須恵器（15 ～ 18）、灰釉陶器（19）、緑釉陶器（20 ～ 22）、青磁（23）、土馬（24 ～ 26）、平瓦（27）である。

土師器（13）は皿の口縁部である。口縁端部はややつまみ上げ、丸くおさめる。外面はケズリで整える。A 系列にあたる。（14）は高杯 A の脚部である。脚部をタテケズリして多角形に面取りするもの。

須恵器（15）は蓋の口縁部としたが、皿の可能性もある。口縁端部を屈曲させるもの。内面をナデで丁寧に仕上げて平滑に仕上げる。（16）は壺の底部である。厚手の底部に低い高台を貼り付けるもの。体部外面下部に 1 条沈線がめぐり、外面の一部に白色の自然釉が付着する。（17・18）は鉢の底部である。（17）は東播系須恵器である。（18）は底部がほとんど突出しないもの。立ち上がりが緩やかである。

灰釉陶器（19）は椀の底部である。端反する高台を貼り付けるもの。釉調は半透明のオリーブ色。高台外面は施釉するが、内面はほとんど施釉しない。

緑釉陶器（20）は皿の口縁部である。口縁部は外上方にのびてやや屈曲して丸くおさめる。須恵質の素地に灰色がかった緑色のややツヤのある釉が薄くかかる。（21・22）は椀の底部である。いずれも削り出し円盤状高台のもの。（21）はほとんど釉が剥がれているもの。素地は須恵質である。（22）は見込みに 1 条沈線がめぐるもの。釉調は浅黄色で、全面にかかる。京都産である。

青磁（23）は皿である。平底で、内面の底部との境に 1 条沈線を巡らし、見込みに草花文を施す。青味を帯びた緑色の釉が内外面にかかる。龍泉窯系のもの。

土馬（24 ～ 26）は（24）が頭部、（25・26）が脚部である。いずれも小型化したもの。

平瓦（27）は凹面に布目圧痕、凸面に縄目叩き痕が残る。

以上、掘方から出土した（6）は I 期（9 世紀前半）、井戸枠内から出土した（8）は 9 世紀代、掘方上面から出土した（13）は 1C 段階（810 ～ 840 年ごろ）、（14）は 9 世紀前半、（20･22）は II 期（9 世紀後半）、（23）は鎌倉時代の所産である。

B　中世（図版 19 ～ 22・38・39）

井戸 112（28 ～ 32）　土師器（28・29）、須恵器（30）、青磁（31）、白磁（32）である。

土師器（28・29）は皿の口縁部である。（28）は口縁部が肥厚するもの。小片で口径が復元できないが、いずれも N 系列の小型品である。

須恵器（30）は甕の口縁部である。口縁部は外上方に立ち上がり、内外に肥厚して外端面を凹ませるもの。外面には 2 条の沈線を施し、上下に櫛描波状文（1 帯 4 条）が配置される。

青磁（31）は椀である。厚手の底部に削り出し高台を有するもの。釉調は半透明の青みがかった緑色で、厚くかかる。高台と底部外面は少し釉がかかるがほとんど施釉しない。小椀 I － 1 類にあたる。

白磁（32）は椀である。口縁端部には肉厚な玉縁があり、その直下からヘラケズリをする。釉調は灰白色である。体部外面は施釉しない。椀Ⅳ－１類であろう。

以上、（28･29）は６C 段階（1230 ～ 1260 年頃）、（30）は平安時代前期、（31）はＤ期（12 世紀中頃～ 12 世紀後半）、（32）はＣ期（11 世紀後半～ 12 世紀前半）の所産である。

井戸 118（33 ～ 54）　井戸枠内（33 ～ 43）、掘方上面（44 ～ 54）に分けられる。

井戸枠内出土の（33 ～ 43）は、土師器（33・34）、瓦器（35 ～ 38）、褐釉陶器（39・40）、青磁（41・42）、白磁（43）である。

土師器（33･34）は皿である。（33）は２段ナデのもの。N 系列の小型品である。（34）は口縁部が外へ開く形状を持つもの。

瓦器（35 ～ 37）は羽釜である。（35）は口縁部が直立して上面に凹んだ端面をつくるもの。低い台形の鍔を水平に貼り付ける。（36）は口縁部がやや内傾するもの。鍔は（35）と比べてやや高い。（35･36）はいずれも京都型である。（37）は口縁部が強く内傾するもの。鍔は三角形で水平近くに貼り付けられる。河内･和泉型である。いずれも体部外面に指オサエ痕が残る。（38）は鍋である。受け口状を呈するもの。口縁端部が内側にやや尖る。体部外面は指オサエ痕が残り、銀化する。

褐釉陶器（39･40）は壺の体部片である。（39）は内外面ともに釉がほとんど剥がれて残らない。外面下部に沈線が２条めぐる。素地は赤褐色を呈する。（40）は黄褐色の釉が薄めにかかる。いずれも中国産である。

青磁（41）は椀Ｉ類である。厚手の底部に低い台形状の高台が削り出されるもの。半透明で濃緑色の釉が厚くかかる。底部外面は施釉しない。龍泉窯系である。（42）は壺の肩部である。把手の下部が残存する。釉調は不透明な灰色で、均質な厚さで薄くかかる。

白磁（43）は椀Ⅴ－２類の口縁部である。口縁部が外反して丸くおさめるもの。灰色の釉が薄めにかかる。

掘方上面出土の（44 ～ 54）は、土師器（44・45）、須恵器（46・47）、瓦器（48 ～ 51）、褐釉陶器（52）、青磁（53）、白磁（54）である。

土師器（44）は皿である。口縁部が肥厚し、端部を丸くおさめるもの。N 系列の小型品である。（45）は椀である。S 系列にあたる。

須恵器（46・47）は東播系の鉢である。（46）は口縁端部が上下に拡張するもの。口縁端部外面のみ灰色を呈し、それ以外は灰白色である。（47）は底部に厚みのあるもの。

瓦器（48 ～ 50）は羽釜である。（48）は口縁部が外傾し、断面方形の鍔が水平近くに貼り付けられる。内面は灰白色を呈する。（49）は口縁部が外傾する。鍔は短く、丸みを帯びた台形を呈する。（48・49）はいずれも京都型である。（50）は突出した長い鍔を有するもの。（51）は鍋である。口縁部が内湾して内傾する端面をつくりだす。

褐釉陶器（52）は壺の体部片である。黄褐色の釉が薄くかかる。中国産のもの。

青磁（53）は皿Ⅰ－１ｂの底部である。見込みは櫛点描文とヘラで文様を施す。黄味がかった緑色の釉が薄めにかかるが、外面下半部以下は施釉しない。同安窯系のもの。

白磁（54）は皿Ⅸである。少し青みがかった不透明の釉がかかる。口縁端部内面は釉剥ぎをし、底部外面は一部釉がかからない。

以上、井戸枠内出土の（33）は６Ｂ～Ｃ段階（1200～1260年頃）、（34）は7A段階（13世紀後半）、（35）は13世紀後半、（36）は14世紀後半頃、（37）は14～15世紀、（39･40）は鎌倉時代、（41）はＤ期（12世紀中頃～後半）、（43）はＣ期（11世紀後半～12世紀前半）、掘方上面出土の（44）は６Ｃ段階（1230～1260年頃）、（45）は13世紀後半～14世紀、（46）は12世紀末～13世紀初頭、（48）は14世紀後半ごろ、（49）は13世紀後半ごろ、（52）は鎌倉時代、（54）はＦ期（13世紀後半～14世紀前半）の所産である。

井戸123（55～74）　掘方（55～57）、井戸枠内（58～70）、掘方上面（71～74）に分けられる。

掘方出土の（55～57）は、土師器（55）、瓦器（56）、軒丸瓦（57）である。

土師器（55）は皿である。２段ナデのもの。口縁部が外側へ開く。Ｎ系列にあたる。

瓦器（56）は椀である。内面に平行暗文が見える。楠葉型のもの。

軒丸瓦（57）は複弁蓮華文軒丸瓦である。

井戸枠内出土の（58～70）は、土師器（58～62）、須恵器（63）、瓦器（64～66）、瓦質土器（67）、焼締陶器（68）、緑釉陶器（69）、青白磁（70）である。

土師器（58～62）は皿である。（58）はＮ系列の小型品である。（59）は口縁部４カ所に煤が付着する灯明皿である。Ｎ系列の小型品である。（60）は口縁端部をつまみ上げて丸くおさめるもの。口縁部に煤が付着している。Ｎ系列にあたる。（61）は２段ナデのもの。Ｓ系列にあたる。（62）は２段ナデのもの。口縁部がやや肥厚し、端部を丸くおさめる。

須恵器（63）は東播系の鉢である。薄手で、口縁端部が尖る。

瓦器（64）は三足羽釜ないし鍋の脚部である。内面にハケ目が顕著に残る。（65・66）は鍋である。いずれも受け口状を呈すもの。口縁端部は（65）はやや凹み、（66）はやや丸みを帯びる。いずれも外面に指オサエ痕が残る。京都型である。

瓦質土器（67）は鉢の口縁部である。口縁端部が内傾し、内側にやや拡張するもの。

焼締陶器（68）は甕である。オリーブ色の釉がかかる。

緑釉陶器（69）は椀である。削り出し輪高台で、底部外面は施釉しない。

青白磁（70）は香炉の蓋である。不透明の淡い水色と白色の釉がかかる。

掘方上面出土の（71～74）は、瓦器（71）、青磁（72～74）がある。

瓦器（71）は椀である。口縁内側端部に沈線をめぐらし、体部内面には平行暗文を施すもの。楠葉型である。

青磁（72～74）は椀である。（72）はⅠ－２類のもの。口縁部が少し外反し、体部内面に輪花を有する。青みがかった緑色の釉が均質にかかる。（73）はⅠ類のもの。口縁部内面に２条沈線がめぐり、体部内面にも沈線が見える。（72･73）はいずれも龍泉窯系である。（74）はⅠ－１ｂのもの。は体部外面に細かい櫛描直線文を縦位に施し、内面には櫛点描文を施す。同安窯系である。

以上、掘方出土の（55）は６Ｂ段階（1200 ～ 1230 年頃）、（56）は 12 世紀後半～ 13 世紀初頭の所産か、井戸枠内出土の（58・59）は６Ｃ段階（1230 ～ 1260 年頃）、（60）は６Ｂ～Ｃ段階（1200 ～ 1260 年頃）、（61）は６Ｂ段階（1200 ～ 1230 年頃）、（63）は 13 世紀前半頃、（65・66）は 13 ～ 14 世紀、掘方上面出土の（71）は 13 世紀、（72 ～ 74）は 12 世紀中期～後半の所産である。

井戸 129（75） 土師器（75）である。

土師器（75）は皿である。曲物の直下から出土した。２段ナデのもの。底部がやや盛り上がり、口縁端部はやや肥厚する。N 系列にあたる。６Ｂ段階（1230 ～ 1260 年頃）の所産である。

井戸 148（76 ～ 80） 土師器（76・77）、須恵器（78）、瓦質土器（79）、灰釉陶器（80）である。

土師器（76・77）は皿である。（76）は白色のもの。口縁部に煤が付着する灯明皿である。（77）は２段ナデのもの。N 系列にあたる。須恵器（78）は東播系の鉢である。口縁端部がやや尖り、端面が外傾するもの。瓦質土器（79）は鉢の口縁部である。口縁部が外上方に伸びて端部を内外に肥厚して丸い端部をつくるもの。灰釉陶器（80）は椀の底部である。逆三角形の高台が貼り付く。以上、（77）は６Ａ段階（1170 ～ 1200 年ごろ）、（78）は 12 世紀後半の所産である。

井戸 149（81） 瓦質土器（81）である。

瓦質土器（81）は鉢である。外上方に伸びて外傾する平坦面をつくるもの。

井戸 154（82） 須恵器（82）である。

須恵器（82）は壺である。丸みを帯びた台形を呈する高台が貼り付くもの。

井戸 169（83 ～ 87） 井戸枠内（83・84・86）、曲物内（85・87）に分けられる。

井戸枠内出土の（83・84・86）は、土師器（83）、瓦器（84）、施釉陶器（86）である。

土師器（83）は皿である。コースター状のもの。Sc 系列にあたる。

瓦器（84）は羽釜である。口縁部が直立し、台形状の鍔が水平に付くもの。京都型である。

施釉陶器（86）は壺である。底部は厚く、削り出し高台である。不透明の灰色の釉が薄くかかる。内面は全面に施釉するが、外面は下半部からは施釉しない。

曲物内出土の（85・87）は、瓦器（85）、白磁（87）である。

瓦器（85）は羽釜である。口縁部がやや内傾し、短い台形状の鍔が水平に付くもの。京都型である。

白磁（87）は皿である。口縁部はやや外反する。体部内面に一条沈線をめぐらし、見込み部の釉を輪状に掻き取る。外面下半部からは施釉せず、高台は輪状である。底部には墨書があるが判読不能。

以上、井戸枠内出土の（83）は 13 ～ 14 世紀、（84）は 13 世紀後半、曲物内出土の（85）は 13 世紀前半の所産である。

ピット 078（88 ～ 90） 土師器（88・89）、緑釉陶器（90）がある。

土師器（88・89）は皿の口縁部である。いずれも２段ナデのもの。N 系列である。

緑釉陶器（90）は椀ないし皿の断片であろう。釉調は黄味がかった淡い緑色である。（88）は６

B ～ C 段階（1200 ～ 1260 年頃）の所産である。

土坑 077（91） 施釉陶器（91）がある。

施釉陶器（91）は瀬戸焼の人形である。人ないし動物が座っている形状で、頭部と両腕は欠損しているもの。胴体に頭部、腕、脚を貼り付けた痕跡が確認できる。黄色の釉が全体的にかかる。

土坑 082（92・93） 施釉陶器（92）、白磁（93）がある。

施釉陶器（92）は鉢の口縁部である。黒褐色の鉄釉がかかる。口縁端部は平坦面を持ち、体部は内傾する。白磁（93）は椀の底部である。高台は逆三角形を呈する。高台外面は施釉される。以上、中世～近世初頭の所産。

土坑 083（94・95） 瓦器（94）、灰釉陶器（95）がある。

瓦器（94）は羽釜の口縁部である。口縁部はやや内傾し、端部が丸みを持つ台形の鍔を有する。京都産のもの。灰釉陶器（95）は椀の底部である。貼り付け高台が外湾して丸くおさめるもの。以上、中世の所産である。

土坑 084（96 ～ 98） 須恵器（96）、青磁（97）、白磁（98）がある。

須恵器は甕（96）である。外湾する口縁部を有するもの。端部は外傾する平坦面を有する。青磁（97）は椀Ⅰ類である。口縁部はやや外反してそのまま丸くおさめるもの。内面に草花文を施す。白磁（98）は椀Ⅳ類である。口縁端部は肉厚な玉縁を有するもの。（96）は平安時代後期の所産である。（97）はＤ期（12 世紀中頃～後半）、（98）はＣ期（11 世紀後半～ 12 世紀前半）

土坑 088（99 ～ 103） 土師器（99 ～ 101）、瓦器（102・103）がある。

土師器（99・100）は皿である。（99）は２段ナデのもの。口縁部が肥厚し、端部をそのまま丸くおさめるもの。N 系列の大型品である。（100）は白色のもの。口縁部はそのまま終わるもの。S 系列にあたる。（101）は丸底鉢である。外面をハケ調整するもの。

瓦器（102）は羽釜である。口縁部がわずかに内傾するもの。口縁端部はやや外傾する。丸みを帯びた台形状の鍔が水平に付く。（103）は鍋である。受け口状を呈するもの。口縁端部が少し尖る。京都型である。

以上、（99）は６Ｃ段階（1230 ～ 1260 年頃）、（100）は７Ｂ段階（1290 ～ 1320 年頃）、（103）は 13 世紀末～ 14 世紀初頭の所産である。

土坑 089（104 ～ 112） 土師器（104 ～ 107）、瓦器（108 ～ 112）がある。

土師器（104・105）は皿である。（104）は２段ナデのもの。端部は内側にややつまみ上げる。N 系列にあたる。（105）は口縁端部を丸くおさめるもの。S 系列にあたる。（106）は椀である。口縁部がやや肥厚し、端部を丸くおさめるもの。S 系列にあたる。（107）は甕の口縁部である。

瓦器（108 ～ 110）は羽釜である。（108）は口縁部がわずかに内傾し、丸みを帯びた台形状の鍔が水平に付くもの。京都型である。（109）は内傾する器面に突出した鍔が付くもの。（110）は内傾する口縁部に三角形の鍔が水平に付く。河内・和泉型である。（111 ～ 112）は鍋である。いずれも京都型である。（111）は受け口状のもの。体部は内湾し、口縁端部は内側に尖る。（112）は受け口状のもの。端面が平坦である。

以上、(105) は6C段階（1230 ～ 1260年頃)、(107) は7B段階（1290 ～ 1320年頃)、(108) は13世紀、(110) は14世紀、(111) は13世紀末～ 14世紀初頭、(112) は13 ～ 14世紀の所産である。

土坑090（113） 土師器（113）がある。

土師器（113）は皿である。2段ナデのもの。端部はそのまま丸くおさめる。N系列の小型品にあたる。6B段階（1200 ～ 1230年頃）の所産である。

土坑093（114） 土師器（114）がある。

土師器（114）は皿である。外上方にのび、端部がそのまま終わるもの。N系列の小型品にあたる。6B ～ C段階（1200 ～ 1260年頃）の所産である。

土坑120（115 ～ 118） 土師器（115)、須恵器（116)、瓦器（117・118）がある。

土師器（115）は皿の口縁部である。口縁端部をそのまま丸くおさめるもの。N系列である。須恵器（116）は壺の底部である。薄手のもの。瓦器（117）は羽釜である。口縁部は直立し、端部はやや外傾するもの。台形状の鍔を有する。京都型である。(118) は鍋の口縁部である。受け口状を呈し、口縁端部が内側に尖るもの。京都型である。以上、(115) は6C段階（1230 ～ 1260年頃)、(117) は13世紀、(118) は14世紀の所産である。

土坑130（119） 土師器（119）がある。

土師器（119）は皿の口縁部である。2段ナデのもの。口縁端部はそのまま丸くおさめる。N系列である。6C段階（1230 ～ 1260年頃）

土坑140（120 ～ 125） 土師器（120 ～ 122)、瓦器（123・124)、瓦質土器（125）である。

土師器（120･121）は皿である。(120) は口縁端部をそのまま丸くおさめるもの。N系列である。(121) は2段ナデのもの。口縁端部はそのまま丸くおさめる。N系列である。(122) は椀の底部である。高台が逆三角形に貼り付くもの。

瓦器（123）は椀である。口縁部が外反し、端部はそのまま丸くおさめるもの。見込みに螺旋状暗文がある。(124) は鉢である。薄手のもの。内面に漆が付着していた痕跡が残る。

瓦質土器（125）は浅鉢Ⅰ（奈良火鉢）である。口縁部がやや内湾し、端部がやや丸みを帯びるもの。外面に菊花文をスタンプする。

以上、(120) は6C段階（1230 ～ 1260年頃)、(121) は6B段階（1200 ～ 1230年頃)、(124) は鎌倉時代、(125) は14世紀頃の所産である。

土坑142（126 ～ 127） 施釉陶器（126・127）がある。

(126) は施釉陶器の椀の底部である。輪高台のもの。高台および底部外面以外の内外面に施釉する。釉調は透明な黄灰色である。外面上部には唐草文が描かれる。京焼である。

施釉陶器（127）は椀である。口縁部はやや外反する。内面は全て施釉し、体部外面下半部からは施釉しない。削り出し輪高台である。瀬戸焼である。

土坑143（128 ～ 129） 土師器（128)、フイゴ（129）である。

土師器（128）は皿の口縁部である。2段ナデのもの。端部はそのまま丸くおさめる。フイゴ

（129）は羽口の破片である。全体的に被熱する。

土坑 145（130 ～ 133） 土師器（130）、緑釉陶器（131）、焼締陶器（132）、白磁（133）である。

土師器（130）は皿の口縁部である。２段ナデのもの。N 系列の小型品にあたる。緑釉陶器（131）は小椀の底部である。高台は低く削り出すもの。釉調は濃緑で、内面のみ施釉する。焼締陶器（132）は鉢の底部である。常滑産のもの。白磁（133）は椀の底部である。台形状の輪高台を削り出すもの。中国産である。

以上、（130）は６C 段階（1230 ～ 1260 年頃）、（133）は 13 世紀の所産である。

土坑 150（134） 土師器（134）は皿の口縁部である。２段ナデのもの。N 系列の小型品である。６C 段階（1230 ～ 1260 年頃）の所産である。

土坑 152（135 ～ 138） 須恵器（135 ～ 137）、瓦器（138）がある。

須恵器（135 ～ 137）は東播系の鉢である。（135）は口縁部が上下に拡張し、端部が丸みを帯びるもの。（136）は口縁部が器面に対して垂直な平坦面をつくるもの。（137）は底部端に角をつくらないもの。瓦器（138）は皿である。口縁端部をそのまま丸くおさめるもの。以上、（135）は 14 世紀前半ごろ、（136）は鎌倉時代前期、（137）は鎌倉時代の所産である。

土坑 155（139 ～ 140） 緑釉陶器（139）、青磁（140）がある。

緑釉陶器（139）は椀の底部である。削り出し蛇の目高台のもの。ほとんど釉が剥がれているが、内面にわずかに釉が残る。青磁（140）は椀である。

土坑 167（141） 緑釉陶器（141）がある。

緑釉陶器（141）は椀の底部である。削り出し円盤状高台のもの。底部には糸切り痕が確認できる。釉調はやや黄味がかった緑色であり、底部には釉が残らない。

C　近世ほか（図版 22・39）

土坑 085（142・143） 灰釉陶器（142）、鉄釉陶器（143）がある。

灰釉陶器（142）は椀である。釉は透明で薄めにかかる。底部は施釉しない。

施釉陶器（143）は天目椀である。口縁端部は少しつまんで引き伸ばす。黒褐色の鉄釉が均質にかかる。以上、近世初頭の所産である。

土坑 159（144） 染付（144）がある。

染付（144）は小椀の底部である。厚みのない高台を削り出すもの。外面に青みがかった灰色の線が３条描かれる。唐津系のもの。

溝 023（145） 染付（145）は皿である。口縁部内面に赤絵による界線を施す。見込みに松と笹の絵を描いた屏風と思われるものが描かれる。

溝 024（146） 染付（146）は皿である。

内面は後円部に沿って魚子文様を展開し、見込みに笹状の植物を配す。

土坑（撹乱）037（147・148） 青磁（147）、骨製品（148）である。

青磁（147）は椀の底部である。削り出し高台のもの。見込みに沈線が２条めぐる。釉調は灰色がかった緑色で、体部外面の下部から施釉しない。

骨製品（148）は簪である。表面をミガキで仕上げる。上端は削られ丸みを帯びる。

撹乱 001（149） 染付（149）は椀である。内面見込みに２条の圏線を入れ、「□店・京都綾小路烏丸」、その中心に「杢」と思われる文字が書かれる。外面には松葉が描かれる。記念品として配布された物であろう。

（２）木製品（図版 23 ～ 26・40・41）

平安時代前期の井戸 168 の井戸枠および曲物、近現代の野壺 051 の柄杓がある。

井戸 168（150 ～ 153） 方形横板組井戸の隅柱（150・152・153）は心持ち材を角柱状に加工し、基部近くに横桟用の方形孔を穿つもの。（150）は四方から削り基部端をチョウナで尖らせ、杭状に加工する。残存長は 62.0 ㎝、幅は 11.9 ㎝、厚さは 11.8 ㎝である。（152）は四方から削り、平坦に仕上げる。残存長は 43.9 ㎝、幅は 11.9 ㎝、厚さは 10.4 ㎝である。（153）は切断して平らに仕上げる。残存長は 48.5 ㎝、幅は 11.0 ㎝、厚さは 8.4 ㎝である。

曲物（151）は底板の断片である。周囲に４箇所の目釘孔を残す。内外面共に削りで仕上げる。板目材。径は 21.3 ㎝、厚さは 0.7 ㎝である。

野壺 051（154） 柄杓（154）は円形の桶に装着された軸の一部が残るもの。桶は柾目材の底板に板材を巻きつけて木釘でとめるもの。軸部との接合の穴を穿つ。軸は断面長方形で、先端を削り、尖らせる。桶と軸との接合は桜の皮とじである。桶の底部外面に「丹」銘の墨書がある。使用者の屋号であろう。桶の径は 13.9 ㎝、高さは 10.6 ㎝、軸部の残存長は 18.7 ㎝、幅は 2.2 ㎝、厚さは 1.6 ㎝である。

Ⅳ章　まとめ

1　調査の成果と課題

まず、調査で明らかになった成果と課題を古い時代から整理する。

都城形成以前　今回、平安時代以前の遺構・遺物は一切検出されていないので、人々の活動を具体的に説明できる資料は得られなかった。しかし、調査地の基盤となる扇状地性砂礫層は、深層断ち割り調査時に採取した炭化物のAMS年代測定によって縄文時代中期前半の堆積物であることが明らかになった。地形分析によると、北東から南西に緩やかに傾斜する地形面の小さな谷地形に位置するが、盆地内では比較的早く安定した地形が形成されたことを証左する。過去、調査地の東方、左京七条二坊四・五町域では、古墳時代前期の遺物が散発的ながら出土しており、扇状地の形成年代は古墳時代初頭とみられる。鴨川起源の扇状地の形成は地域的にも単一の時期と限らず、複雑な様相をもつであろうが、当地付近は縄文時代後期前後に安定期をむかえることが判明したことは、都城形成以前の集団活動を検討する上で重要な成果となった。

平安時代前期　対象地は、七条一坊十二町北東部の西三・四行、北一・二門に推定された。調査の結果、方形の横板組み井戸を１基確認したのみで、行門界を示す柵、溝等の遺構も確認されなかった。井戸の検出位置は、西四行、北二門に相当するので、少なくとも二戸主以上の宅地ということになる。井戸内出土遺物は、特に顕著な遺物がないが、一定量の緑釉陶器を含むことは宅地居住者の階層が一定の地位にあることを示唆する材料になろう。

鎌倉時代　鎌倉時代前期を中心に井戸、土坑が中央部に比較的密集して確認された。この時期は、建物が確認されず、井戸と土坑のみで構成される宅地内での様相を有する点に特徴がある。

まず、検出された井戸から出土した土師器の年代に基づいて、井戸他の遺構を整理すると次のようになる。

6Ａ段階（1170 ～ 1200 頃）：なし
6Ｂ段階（1200 ～ 1230 頃）：井戸 129　土坑 090　ピット 078
6Ｃ段階（1230 ～ 1260 頃）：井戸 112・118・123・148・169・176（169 より古い）
　　土坑 093・120・130・140・145・150
7Ａ段階（1260 ～ 1290 頃）：なし
7Ｂ段階（1290 ～ 1320 頃）：土坑 088・089
7Ｃ段階（1320 ～ 1350 頃）：井戸 118・149　土坑 084

井戸の多くが、鎌倉時代前期の２時期に集中しており、室町時代に最後の井戸が構築されている。井戸枠の構造は、井戸 169 が円形縦板無支持構造である以外、方形の縦板横桟留構造で水溜めに曲物を置くものもある。

特徴は、井戸の規模、構造ともに類似していることが指摘できよう。このような井戸のあり方

は、大規模宅地で未調査区に主要建物が分布して、調査区付近に継続して井戸が設けられたと推測するのが自然な解釈であろうが、周辺の宅地での井戸が密集する状況を参考にすれば異なる解釈も可能になるかもしれない。

まず、平安京内における井戸遺構143基の分布、井戸底面の時期的変遷と地形条件との関係を検討した成果（森・吉越2005）によると、左京七条三坊十四町、同七条四坊三町、同八条三坊七町、右京六条一坊二町など５基以上の井戸が集中する宅地が存在すること、南西に傾斜する地形に井戸が多いこと、井戸底面は、平安時代前期と後期から鎌倉時代とでは１ｍほど深くなり地下水の変化があったこと、などの点が指摘されている。今回の調査成果と対照すると、平安時代前期１基、鎌倉時代９基と鎌倉時代の密集度は高く、密度の高い新たな宅地例となったことになる。井戸底面の標高は、平安時代と鎌倉時代を比較すると最小40㎝、最大60㎝深いので、地下水の変化は概ね同じ傾向を持つことになろう。一方、分析対象にされなかった左京四条二坊十二町では、平安時代から江戸時代の76基の井戸が確認され、井戸底面の標高は同時期でも必ずしも一定でないこと、極端に浅い井戸があり、機能差に伴う可能性もあるなどの点が指摘されている（平尾・山口2003）。従って、先の分析は事例を増やして地域性や井戸の機能も加味しなければならないことになる。

室町時代　鎌倉時代後期の資料は皆無で、室町時代当初に井戸が残るが、基本的にほとんど居住地として活用が顕著でない空白期間があったと推定される。

近世後期以降　近世後期以降、居住を示す遺構は検出されなかったので、基本的に耕作地になったと推定される。そして、近代から現代にかけては大型の野壺が構築されており、近世以降、当地が都市内部における農地化のすすむ状況を見ることができる。

２　中世京都における左京七条一坊の宅地利用

いくつかの文献史料から、鎌倉時代初期に左京七条一坊で２件の大火災があったことが、秋山國三氏の研究で明らかになっている（秋山・仲村1975）。関係する史料を引用する。

〔史料１〕

閏四月十五日、甲申、天晴、亥時許南方有火事、七条北東洞院西辺云々、干時大風吹巽風

限東東洞院、限南七条、限西朱雀、限北四条大焼亡也、（後略）

（『猪熊関白記』承元二年閏四月二七日）

〔史料２〕

閏四月十五日、天晴、昼後雨間降、亥時許南方有火、風猛烈、煙炎如飛、戴冠参内、雖程遥炎上、大風非尋常、依思警衛之職強参入、不見人一人、火漸出大宮云々、暫候之間、及朱雀之由聞之退出、火猶不滅、後聞、火出自北小路東洞院、

七条東西十二町洞院西、朱雀東朱雀南北十二町七条以北自六条東洞院至五条坊門朱雀辺、（後略）

（『明月記』承元二年閏四月十五日）

以上の２史料から、承元２（1208）年、今回の発掘調査地を含む七条以北、四条以南、朱雀以東、東洞院以西の広範囲で大火災があったことが知られる(1)。また、『明月記』正治２（1200）年、11

月に「火七条坊門・匣（くしげ）小路云」とあって、十二町の北東から出火があったことが知られる。このような火事が直接的に十二町付近の何らかの施設の存在を示すものではないが、鎌倉時代における宅地周辺の様相を知る資料となる。

ところで、井戸 123 掘方から出土した東寺系軒丸瓦は、十三町でも出土しており周辺の土地利用を示唆する資料であろう。調査地の南方、九条一坊に所在する東寺は、平安時代末から室町時代にかけて京内に「散在所領」と呼ばれる荘園を有していたことが明らかになっている（橋本 1990）。左京では、七条以南、東一坊から三坊に多く、七条以北にも散在していた。七条一坊では、「七条櫛笥以東与室町間北頬（口東西四丈一尺　奥南北九丈三尺）」が知られる（「東寺領洛中散在敷地注文」）。東寺系軒瓦は、このような散在所領と関係する可能性がある。

鎌倉時代の出土遺物の内容は、一定量の土師器、須恵器、瓦器を主体に、輸入陶磁器、国産陶器という組成で、1 点であるが調査地北西部の土坑 143 からフイゴ羽口が出土している。付近は方形土坑 142 など炭を含む土坑も分布する状況である。これらの内容は、左京八条三坊を中心に鏡など銅製品の生産を生業とする職人町、「七条町」の遺物内容に近い。左京七条二坊五町（東市）跡の調査においても鎌倉時代は類似した遺物組成を示す。

以上から、鎌倉時代前期は、七条大路に面する側に主に建物を配置し、裏手側に当たる今回の調査地は空間地として井戸を配置する宅地利用であったと推定しておきたい。その居住者の中には、工人町と関係する階層が想定することができよう。

註

（1）この時の火災の北限について、秋山國三氏は五条坊門とされる（秋山國三・仲村 研 1975）が、四条とみるのが正しいことは西山良平先生のご教示を得た。

【参考文献】

平尾政幸・山口 真『平安京左京四条二坊十四町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-5）（財）京都市埋蔵文化財研究所　2003 年

平安学園考古学クラブ編「平安京東市周辺の調査－左京七条一坊十一町－」『平安学園教育研究会研究論集』44　平安学園教育研究会　2003 年

平安学園考古学クラブ編「平安京東市外町の調査－左京七条一坊十三町－」平安学園平安中・高等学校 1986 年

平安学園平安京跡遺跡調査委員会「平安京左京七条一坊十三・十四町の調査－」『研究論集』第 41 号　平安学園教育研究会　1998 年

前田義明「18 左京七条一坊」『昭和 56 年度京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）京都市埋蔵文化財研究所　1983 年

秋山國三・仲村研『京都「町」の研究』法政大学出版会　1975 年

橋本初子『中世当時と弘法大師信仰』思文閣出版　1990 年

森 雄仁・吉越昭久「井戸遺構からみた平安時代の地下水環境と洪水－平安京域を中心に－」『京都地域研究』立命館地理学会　2005 年

表２　遺物観察表

図版番号	掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	厚（cm）	色調	焼成	胎土	調整	備考
19	1	須恵器	杯	井戸 168 掘方		(2.1)	9.8		5YR6/1 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・高台貼付時のナデ・回転ヘラケズリ	
19	2	須恵器	壺	井戸 168 掘方		(4.5)			N6/0 灰	良	密（φ 2.0 ㎜以下の長石・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）回転ヘラケズリ・ロクロナデ	自然釉付着
19	3	緑釉陶器	椀	井戸 168 掘方		(1.1)	5.9		胎　2.5Y8/2 灰白 釉　5Y7/3 浅黄	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・施釉、（外）ロクロナデ・施釉・回転ヘラケズリ・施釉	
19	4	緑釉陶器	椀	井戸 168 掘方		(1.7)	5.7		胎　2.5Y8/3 浅黄 釉　2.5Y7/4 浅黄	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・施釉、（外）回転ヘラケズリ・施釉	
19	5	緑釉陶器	椀	井戸 168 掘方		(2.2)	8.8		胎　10YR8/4 浅黄橙 釉　10YR8/4 浅黄橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・施釉か、（外）ロクロナデ・施釉・回転糸切り・施釉	
19	6	緑釉陶器	椀	井戸 168 掘方	13.6		6.4		表面　5Y7/4 浅黄 断面　2.5Y8/2 灰白	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英を含む）	（内）施釉、（外）施釉・削出高台	Ⅰ期（９世紀前半）
19	7	土師器	皿	井戸 168 枠内		(2.2)			7.5YR7/6 橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
19	8	須恵器	甕	井戸 168 枠内		(4.7)			胎　N3/0 暗灰 自然釉　10YR8/1 灰白	良	密（φ 2.0 ㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	自然釉付着 ９世紀代
19	9	須恵器	壺	井戸 168 枠内		(4.5)			N4/0 灰	良	密（φ 3.0 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・高台貼付時のナデ・回転ヘラケズリ	９世紀前半
19	10	緑釉陶器	椀	井戸 168 枠内		(1.1)	6.8		胎　10YR8/1 灰白 釉　10YR7/2 灰白	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・施釉・トチン痕、（外）ロクロナデ・施釉・回転ヘラケズリ・施釉	
19	11	緑釉陶器	椀	井戸 168 枠内		(1.6)	5.7		胎　10YR8/1 灰白 釉　10Y7/2 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・施釉、（外）ロクロナデ・施釉・回転糸切り・施釉	
19	12	施釉陶器	椀	井戸 168 枠内		(1.6)	5.9		胎　2.5Y8/2 灰白 釉　2.5Y8/4 淡黄	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・施釉、（外）ロクロナデ・回転糸切り・施釉	
19	13	土師器	皿	井戸 168		(2.0)			7.5YR7/4 にぶい橙	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	１C 段階（810 ～ 840 年頃）
19	14	土師器	高杯	井戸 168		(4.7)			7.5YR7/4 にぶい橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ナデ、（外）面取り・磨滅のため調整不明	
19	15	須恵器	蓋	井戸 168	13.4	(1.2)			2.5Y7/1 灰白	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	
19	16	須恵器	壺	井戸 168		(5.5)	9.0		N6/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ・ロクロナデのちナデ、（外）ロクロナデのちナデ・貼付高台・ロクロナデのちナデ	
19	17	須恵器	鉢	井戸 168		(3.4)	10.0		N8/0 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・回転糸切り	
19	18	須恵器	鉢	井戸 168		(1.7)	11.6		2.5Y4/1 黄灰	良	密（φ 3.0 ㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・ヘラ切りのちナデ	
19	19	緑釉陶器	椀	井戸 168		(1.5)	6.0		胎　2.5Y7/1 灰白 釉　7.5Y6/2 灰オリーブ	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ・施釉、（外）施釉・貼付高台・ロクロナデのちナデ	
19	20	緑釉陶器	皿	井戸 168		(2.8)			胎　5Y7/1 灰白 釉　2.5GY8/1 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・施釉、（外）ロクロナデ・施釉	Ⅱ期（９世紀後半）
19	21	緑釉陶器	椀	井戸 168		(1.3)	7.0		2.5Y6/1 黄灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・施釉、（外）ロクロナデ・削出高台・施釉	
19	22	緑釉陶器	椀	井戸 168		(1.6)	7.0		胎　10YR7/2 にぶい黄橙 釉　5Y6/2 灰オリーブ	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英を含む）	（内）施釉、（外）施釉・削出高台	京都産 Ⅱ期（９世紀後半）
19	23	青磁	皿	井戸 168		(1.6)			胎　5Y6/1 灰 釉　5Y5/2 灰オリーブ	良	密（φ 0.5 ㎜以下の黒色粒子を含む）	（内）施釉、（外）施釉	見込みに陰刻文有 龍泉窯系 鎌倉時代
19	24	土製品	土馬	井戸 168	縦 (2.6)	横 1.5		1.8	7.5YR7/4 にぶい橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	ナデ、竹管（眼）	頭部
19	25	土製品	土馬	井戸 168	縦 (2.2)	横 (3.1)	高 (2.0)		7.5YR6/3 にぶい褐	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	ナデ	脚部
19	26	土製品	土馬	井戸 168	高 (4.0)	幅 (2.4)		(2.3)	7.5YR7/3 にぶい橙	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	ナデ	前脚部
19	27	瓦	平瓦	井戸 168	長 (10.2)	幅 (8.0)		2.5	N5/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（凹）布目痕、（凸）縄目叩き痕	平安時代前期
19	28	土師器	皿	井戸 112		(1.4)			7.5YR7/4 にぶい橙	良	密（φ 0.5 ㎜以下の石英・雲母・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	外面に煤付着 ６C 段階（1230 ～ 1260 年頃）
19	29	土師器	皿	井戸 112		(1.8)			10YR8/3 浅黄橙	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	６C 段階（1230 ～ 1260 年頃）
19	30	須恵器	甕	井戸 112	不明	不明			表面　N3/0 暗灰 断面　5R4/1 暗灰色	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・チャート・雲母を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	平安時代前期
19	31	青磁	椀	井戸 112		(1.5)	4.6		胎　N7/0 灰白 釉　10GY7/1	良	密（微粒子を含む）	（内）施釉、（外）施釉・削出高台	D 期（12 世紀中頃～後半）
19	32	白磁	椀	井戸 112		(3.0)			胎　N8/0 灰白 釉　10Y8/1 灰白	良	密（微粒子を含む）	（内）ケズリか・施釉、（外）ケズリか・施釉	C 期（11 世紀後半～ 12 世紀前半）
19	33	土師器	皿	井戸 118 枠内	8.3	1.7			10YR7/3 にぶい黄橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	一部に成形台痕有 ６B ～ C 段階（1200 ～ 1260 年頃）
19	34	土師器	皿	井戸 118 枠内	10.8	1.7			7.5YR7/4 にぶい橙	良	密（φ 1.5 ㎜以下の長石・石英・雲母・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・オサエのちナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	7A 段階（1260 ～ 1290 年頃）

図版番号	掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	厚（cm）	色調	焼成	胎土	調整	備考
19	35	瓦器	羽釜	井戸 118 枠内		(3.1)			外　N3/0 暗灰 内　N6/0 灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエ	13 世紀後半
19	36	瓦器	羽釜	井戸 118 枠内	19.0	(4.8)			N3/0 暗灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエのちナデ	14 世紀後半頃
19	37	瓦器	羽釜	井戸 118 枠内	17.6	(4.6)			N3/0 暗灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエ	煤付着 14 ～ 15 世紀
19	38	瓦器	鍋	井戸 118 枠内	25.6	(7.7)			N4/0 灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石を含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・ナデ・オサエ	
19	39	褐釉陶器	壺	井戸 118 枠内		(5.8)			胎　2.5YR5/3 にぶい赤褐 釉　5Y7/3 浅黄	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石を含む）	（内）ロクロナデのち施釉、（外）ロクロナデのち施釉・回転ケズリか	中国産 鎌倉時代
19	40	褐釉陶器	壺	井戸 118 枠内		(8.4)			胎　10YR6/3 にぶい黄橙 釉　2.5Y8/1 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデのち施釉、（外）ロクロナデのち施釉	中国産 鎌倉時代
19	41	青磁	椀	井戸 118 枠内			5.0		表面　7.5Y5/2 灰オリーブ 断面　N8/0 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・黒色粒子を含む）	（内）施釉、（外）施釉・削出高台・釉ハギ	D 期（12 世紀中頃～後半）
19	42	青磁	壺	井戸 118 枠内		(3.6)			胎　N5/0 灰 釉　10Y6/1 灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石を含む）	（内）ロクロナデのち施釉、（外）ケズリのち施釉か・把手部貼付時のナデ・ロクロナデのち施釉	
19	43	白磁	椀	井戸 118 枠内		(2.7)			胎　7.5Y7/1 灰白 釉　7.5Y7/1 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ・施釉、（外）ロクロナデ・施釉	C 期（11 世紀後半～ 12 世紀前半）
20	44	土師器	皿	井戸 118	6.7	1.5			10YR7/3 にぶい黄橙	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6C 段階（1230 ～ 1260 年頃）
20	45	土師器	皿	井戸 118	12.2	(3.0)			10YR8/2 灰白	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	13 世紀後半～ 14 世紀
20	46	須恵器	鉢	井戸 118		(4.0)			N4/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・ナデ、（外）重ね焼き痕跡・ロクロナデ	東播系 12 世紀末～ 13 世紀初頭
20	47	須恵器	鉢	井戸 118		(5.1)	8.6		N5/0 灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・一部ケズリか	東播系
20	48	瓦器	羽釜	井戸 118		(4.2)			N4/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ハケ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエ	14 世紀後半ごろ
20	49	瓦器	羽釜	井戸 118	19.2	(5.8)			N4/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・重ね焼き痕跡・オサエ	煤付着 13 世紀後半ごろ
20	50	瓦器	羽釜	井戸 118		(4.4)			N4/0 灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ハケ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ	煤付着 鎌倉時代
20	51	瓦器	鍋	井戸 118		(5.3)			N3/0 暗灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ハケ、（外）ヨコナデ・ヨコナデのちオサエ・ヨコナデ	
20	52	褐釉陶器	壺	井戸 118		(3.2)			胎　10YR7/3 にぶい黄橙 釉　2.5Y5/3 黄橙	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・施釉、（外）ロクロナデ・施釉	中国産 鎌倉時代
20	53	青磁	皿	井戸 118		(1.6)	5.0		胎　2.5Y7/1 灰白 釉　5Y7/3 浅黄	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）施釉、（外）施釉・回転ヘラケズリ	見込みに陰刻文有
20	54	白磁	皿	井戸 118	10.2	1.8	7.2		表面　10Y8/1 灰白 断面　5Y1/8 灰白	良	密	（内）施釉、（外）釉ハギ・施釉	F 期（13 世紀後半～ 14 世紀前半）
20	55	土師器	皿	井戸 123 掘方	13.1	(2.0)			7.5YR6/3 にぶい褐	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ・オサエ、（外）ヨコナデ・ナデ	6B 段階（1200 ～ 1230 年頃）
20	56	瓦器	椀	井戸 123 掘方		(2.7)			N4/0 灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ミガキ、（外）ヨコナデ・オサエのちミガキ	12 世紀後半～ 13 世紀初頭か
20	57	瓦	軒丸瓦	井戸 123 掘方	瓦当径 (5.8)	残存長 (2.4)		瓦当厚 1.4	N5/0 灰	良	密（φ 1.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（瓦当裏面）不定方向のナデ、（側縁）横方向のケズリ	
20	58	土師器	皿	井戸 123 枠内	8.2	1.4			7.5YR7/3 にぶい橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の石英を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	口縁部に煤付着 6C 段階（1230 ～ 1260 年頃）
20	59	土師器	皿	井戸 123 枠内	8.3	1.7			10YR8/2 灰白	良	密（φ 1.1 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6C 段階（1230 ～ 1260 年頃）
20	60	土師器	皿	井戸 123 枠内	12.2	(2.2)			7.5YR7/3 にぶい橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6B ～ C 段階（1200 ～ 1260 年頃）
20	61	土師器	皿	井戸 123 枠内	12.6	(3.1)			10YR8/2 灰白	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6B 段階（1200 ～ 1230 年頃）
20	62	土師器	皿	井戸 123 枠内	13.7	(2.8)			7.5YR7/4 にぶい橙	良	密（φ 1.5 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
20	63	須恵器	鉢	井戸 123 枠内		(5.0)			N4/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ・ロクロナデのちナデ、（外）重ね焼きの痕跡・ロクロナデ	東播系 13 世紀前半頃
20	64	瓦器	三足羽釜 / 鍋	井戸 123 枠内		(9.4)			N5/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ハケ、（外）脚部貼付ナデ・オサエ・ナデ・脚部貼付ナデ・オサエ	
20	65	瓦器	鍋	井戸 123 枠内	27.2	(1.8)			2.5Y7/1 灰白	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	13 ～ 14 世紀
20	66	瓦器	鍋	井戸 123 枠内	25.4	(5.8)			10YR7/2 にぶい黄橙	良	密（φ 2.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・板ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	外面に煤付着 13 ～ 14 世紀
20	67	瓦質土器	鉢	井戸 123 枠内		(3.1)			内外面　10YR4/1 褐灰 断面　5YR6/4 にぶい橙	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ナデ	
20	68	焼締陶器	甕	井戸 123 枠内		(7.8)			7.5YR5/3 にぶい褐	良	密（φ 2.0 ㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・自然釉付着・オサエのちヨコナデ、（外）ヨコナデ・ハケか・自然釉付着	常滑焼
20	69	緑釉陶器	椀	井戸 123 枠内		(1.5)	5.4		胎　10YR7/2 にぶい黄橙 釉　5Y7/3 浅黄	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石を含む）	（内）ロクロナデ・ナデ・ミガキのち施釉、（外）施釉・削出高台	

図版番号	掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	厚（cm）	色調	焼成	胎土	調整	備考
20	70	青白磁	香炉蓋	井戸 123 枠内	8.0	(1.6)			胎　2.5Y8/1 灰白 釉　5BG7/1 明青灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の黒色粒子を含む）	（内）施釉・回転ケズリ、（外）陰刻・施釉	
20	71	瓦器	椀	井戸 123	13.0	(3.2)			表面　5Y4/1 灰 断面　2.5Y8/4 浅黄	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石を含む）	（内）ナデのちミガキ、（外）ヨコナデ・オサエ	内面に平行暗文有 13 世紀
20	72	青磁	椀	井戸 123	15.8	(3.5)			胎　N7/0 灰白 釉　2.5GY6/1 オリーブ灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の黒色粒子を含む）	（内）施釉、（外）施釉	内面に陰刻文、内外面に貫入有 12 世紀中期～後半
20	73	青磁	椀	井戸 123		(3.9)			胎　N6/0 灰 釉　5GY6/1 オリーブ灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・黒色粒子を含む）	（内）施釉、（外）施釉	内面に陰刻文有 12 世紀中期～後半
20	74	青磁	椀	井戸 123		(3.5)			胎　N7/0 灰白 釉　2.5GY6/1 オリーブ灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・黒色粒子を含む）	（内）施釉、（外）施釉	内外面に陰刻文有 12 世紀中期～後半
20	75	土師器	皿	井戸 129 曲物下	9.5	1.7			10YR7/4 にぶい黄橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の石英を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6B 段階（1230 ～ 1260 年頃）
20	76	土師器	皿	井戸 148	9.5	1.2			10YR8/2 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	口縁部に煤付着
20	77	土師器	皿	井戸 148	13.7	(2.7)			7.5YR7/4 にぶい橙	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6A 段階（1170 ～ 1200 年ごろ）
20	78	須恵器	鉢	井戸 148		(3.0)			N5/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	東播系 12 世紀後半
20	79	瓦質土器	鉢	井戸 148		(3.8)			10YR7/2 にぶい黄橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・チャート・赤色粒子・雲母を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	
20	80	灰釉陶器	椀	井戸 148		(1.4)	8.9		10YR8/2 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）貼付高台時のナデ	
20	81	瓦質土器	鉢	井戸 149		(4.2)			N3/0 暗灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・ヨコナデのちハケ・ヨコナデ・オサエ	15 世紀
20	82	須恵器	壺	井戸 154		(7.7)	13.8		2.5Y7/1 灰白	良	密（φ 3.0 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・回転ヘラケズリ・高台貼付時のナデ	
21	83	土師器	皿	井戸 169 枠内	4.2	0.8			10YR8/2 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	13 ～ 14 世紀
21	84	瓦器	羽釜	井戸 169 枠内		(4.9)			N5/0 灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエ	外面に煤付着 13 世紀後半
21	85	瓦器	羽釜	井戸 169 曲物内	25.2	(6.4)			N4/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・板ナデ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエ	外面に煤付着 13 世紀前半
21	86	施釉陶器	壺	井戸 169 枠内		(9.1)	7.4		胎　10YR8/3 浅黄橙 釉　2.5Y7/1 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ロクロナデのち施釉、（外）ロクロナデのち施釉・削出高台	
21	87	白磁	皿	井戸 169 曲物内	9.3	2.4	4.5		胎　N7/0 灰白 釉　10Y8/1 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ・施釉・蛇の目釉ハギ・施釉、（外）ロクロナデ・施釉・削出高台	高台内に墨書有
21	88	土師器	皿	ピット 078		(1.4)			表面　10YR7/4 にぶい黄橙 断面　10YR7/3 にぶい黄橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下のチャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・ナデ	6B ～ C 段階（1200 ～ 1260 年頃）
21	89	土師器	皿	ピット 078		(1.5)			表面　10YR6/4 にぶい黄橙 断面　10YR6/4 にぶい黄橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下のチャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・ナデ	
21	90	緑釉陶器	椀 / 皿	ピット 078		(1.4)			表面　5Y7/3 浅黄 断面　2.5Y8/2 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下のチャートを含む）	（内）釉ハギ・施釉、（外）釉ハギ・施釉	
21	91	施釉陶器	人形	土坑 077		(3.8)			表面　5Y7/6 黄 断面　2.5Y8/1 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石を含む）	（内）施釉、（外）施釉	瀬戸焼
21	92	施釉陶器	鉢	土坑 082		(1.8)			表面　7.5Y2/1 黒 断面　10YR8/2 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石を含む）	（内）施釉、（外）施釉	
21	93	白磁	椀	土坑 082		(1.4)			表面　5Y7/1 灰白 断面　5Y7/1 灰白	良	密（φ 1.0 ㎜以下の黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）削出高台	
21	94	瓦器	羽釜	土坑 083		(2.4)			N4/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ハケ・ヨコナデ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエ	
21	95	灰釉陶器	椀	土坑 083		(1.5)			表面　5Y8/1 灰白 断面　5Y8/1 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）重ね焼き痕跡、（外）貼付高台	
21	96	須恵器	甕	土坑 084		(5.4)			N7/0 灰白	良	密（φ 2.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ケズリ・ヨコナデ、（外）ヨコナデ	平安時代後期
21	97	青磁	椀	土坑 084		(3.1)			胎　7.5Y7/1 灰白 釉　7.5Y6/2 灰オリーブ	良	密	（内）ロクロナデのち施釉、（外）ロクロナデのち施釉	内面に草花文有 D 期（12 世紀中頃～後半）
21	98	白磁	椀	土坑 084		(3.5)			胎　N8/0 灰白 釉　N8/0 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデのち施釉、（外）回転ケズリのち施釉	C 期（11 世紀後半 ～ 12 世紀前半）
21	99	土師器	皿	土坑 088	11.8	(2.1)			7.5YR7/4 にぶい橙	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6C 段階（1230 ～ 1260 年頃）
21	100	土師器	皿	土坑 088	11.8	(2.7)			10YR8/2 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	7B 段階（1290 ～ 1320 年頃）
21	101	土師器	丸底鉢	土坑 088		(4.4)			5YR5/4 にぶい赤褐	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ケズリ、（外）ヨコナデ・横方向のハケ・斜め方向のハケ・ナデ	
21	102	瓦器	羽釜	土坑 088	23.2	(6.7)			2.5Y4/1 黄灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエ	
21	103	瓦器	鍋	土坑 088		(2.8)			N4/0 灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	13 世紀末～ 14 世紀初頭
21	104	土師器	皿	土坑 089		(1.8)			7.5YR7/4 にぶい橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
21	105	土師器	皿	土坑 089		(2.5)			10YR8/2 灰白	良	密（φ 2.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6C 段階（1230 ～ 1260 年頃）
21	106	土師器	椀	土坑 089	10.9	2.6			10YR8/2 灰白	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
21	107	土師器	甕	土坑 089		(2.3)			10YR8/3 浅黄橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ	7B 段階（1290 ～ 1320 年頃）
21	108	瓦器	羽釜	土坑 089		(4.4)			N4/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）鍔貼付時のナデ・オサエ	13 世紀

図版番号	掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	厚（cm）	色調	焼成	胎土	調整	備考
21	109	瓦器	羽釜	土坑 089		(3.3)			N3/0 暗灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ハケ、（外）鍔貼付時のナデ	
21	110	瓦器	羽釜	土坑 089	17.7	(4.3)			N3/0 暗灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエ	14 世紀
21	111	瓦器	鍋	土坑 089		(8.7)			N4/0 灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・オサエ	13 世紀末～ 14 世紀初頭
21	112	瓦器	鍋	土坑 089	29.0	4.5			N4/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・オサエ	13 ～ 14 世紀
21	113	土師器	皿	土坑 090	9.9	(1.5)			10YR8/3 浅黄橙	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ、（外）オサエ	6Ｂ段階（1200 ～ 1230 年頃）
21	114	土師器	皿	土坑 093		(1.9)			10YR7/3 にぶい黄橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6Ｂ～Ｃ段階（1200 ～ 1260 年頃）
22	115	土師器	皿	土坑 120		(1.9)			7.5YR7/4 にぶい橙	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6Ｃ段階（1230 ～ 1260 年頃）
22	116	須恵器	壺	土坑 120		(2.6)			N5/0 灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・ナデ・ヘラケズリ	
22	117	瓦器	羽釜	土坑 120	21.3	(2.9)			10YR4/1 褐灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエ	13 世紀
22	118	瓦器	鍋	土坑 120		(3.6)			N4/0 灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	14 世紀
22	119	土師器	皿	土坑 130		(1.9)			7.5YR7/3 にぶい橙	良	密（φ 1.5 ㎜以下の長石・石英・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6Ｃ段階（1230 ～ 1260 年頃）
22	120	土師器	皿	土坑 140		(1.6)			7.5YR7/4 にぶい橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6Ｃ段階（1230 ～ 1260 年頃）
22	121	土師器	皿	土坑 140	9.4	1.6			7.5YR7/3 にぶい橙	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6Ｂ段階（1200 ～ 1230 年頃）
22	122	土師器	椀	土坑 140		(1.3)			7.5YR7/4 にぶい橙	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・高台貼付時のナデ・ナデ	
22	123	瓦器	椀	土坑 140	8.8	(1.7)			N4/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	内面螺旋状暗文有
22	124	瓦器	鉢	土坑 140		(5.4)			N4/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ナデ	内面漆付着 鎌倉時代
22	125	瓦質土器	鉢	土坑 140		(7.1)			N4/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英を含む）	（内）横方向のミガキ・板ナデのちミガキ・スタンプ文押印時のオサエ（外）横方向のミガキ・スタンプ文・縦方向のミガキ	外面にスタンプ文有 14 世紀頃
22	126	施釉陶器	椀	土坑 142		(1.9)	4.9		胎　2.5Y8/2 灰白 釉　2.5Y7/2 灰黄	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石を含む）	（内）施釉・トチン痕、（外）施釉・削出高台	京焼 外面に文様有
22	127	施釉陶器	椀	土坑 142	6.9	3.2	3.0		胎　5Y7/1 灰白 釉　5Y7/3 浅黄	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデのち施釉、（外）ロクロナデ・回転ケズリ・削出高台・施釉	瀬戸焼
22	128	土師器	皿	土坑 143		(2.4)			7.5YR7/4 にぶい橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子・雲母を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
22	129	鞴	羽口	土坑 143	長 (6.7)	幅 (7.1)		2.5	10YR8/2 灰白	良	密（φ 3.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	心棒づくり、（外）ナデ	全体的に被熱
22	130	土師器	皿	土坑 145	7.7	1.5				良	密（φ 1.5 ㎜以下の長石・雲母を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6Ｃ段階（1230 ～ 1260 年頃）
22	131	緑釉陶器	椀	土坑 145		(2.8)	4.0		胎　2.5Y7/1 灰白 釉　5Y6/2 灰オリーブ	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・赤色粒子を含む）	（内）施釉、（外）ロクロナデ・ケズリ・削出高台	
22	132	焼締陶器	鉢	土坑 145		(4.2)			外　10YR5/2 灰黄褐 内　7.5YR6/4 にぶい橙	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデのちナデ、（外）ナデ	底面に砂付着 常滑産
22	133	白磁	椀	土坑 145		(2.0)	5.9		胎　2.5Y8/1 灰白 釉　5Y8/2 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石を含む）	（内）施釉、（外）施釉・回転ケズリ・削出高台	中国産 13 世紀
22	134	土師器	皿	土坑 150	9.3	1.3			10YR8/3 浅黄橙	良	密（φ 1.5 ㎜以下の長石・雲母を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	6Ｃ段階（1230 ～ 1260 年頃）
22	135	須恵器	鉢	土坑 152		(2.7)			N5/0 灰	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ・ナデ、（外）重ね焼き痕跡・自然釉・ロクロナデ	東播系 14 世紀前半ごろ
22	136	須恵器	鉢	土坑 152		(4.6)			N4/0 灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・石英チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	東播系 鎌倉時代前期
22	137	須恵器	鉢	土坑 152		(3.5)			N7/1 灰白	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・ロクロケズリ	東播系 鎌倉時代
22	138	瓦器	皿	土坑 152		(1.5)			N5/0 灰	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
22	139	緑釉陶器	椀	土坑 155		(1.2)	5.8		2.5Y8/2 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の赤色粒子を含む）	（内）ナデか、（外）ロクロナデか・削出高台	
22	140	青磁	椀	土坑 155		(1.5)			胎　5Y7/1 灰白 釉　7.5Y7/1 灰白	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石を含む）	（内）ロクロナデのち施釉、（外）ロクロナデ・回転ケズリのち施釉	
22	141	緑釉陶器	椀	土坑 167		(1.4)	4.8		胎　10YR8/2 灰白 釉　明オリーブ	良	密（φ 0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデのち施釉、（外）ロクロナデのち施釉・回転糸切り	
22	142	灰釉陶器	椀	土坑 085		(1.9)	3.6		胎　2.5Y8/2 灰白 釉　2.5Y7/3 浅黄	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）施釉、（外）削り出し高台・施釉	
22	143	施釉陶器	天目椀	土坑 085		(3.9)			胎　10YR8/2 灰白 釉　10YR2/1 黒	良	密（φ 1.0 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）施釉、（外）施釉	近世初頭
22	144	染付	椀	土坑 159		(1.8)	3.4		胎　N8/0 灰白 釉　2.5GY5/1 オリーブ灰	良	密	（内）施釉、（外）施釉・圏線・削出高台・釉ハギ・施釉	唐津系
22	145	染付	皿	溝 023	11.6	2.1	7.6		表面　5GY 8/1 灰白 断面　N8/0 灰白	良	密	（内）施釉、（外）施釉・削出高台	色絵付 屏風に松
22	146	染付	皿	溝 024	5.4	2.4	6.2		表面　N8/0 灰白 断面　N8/0 灰白	良	密	（内）施釉、（外）施釉・削出高台・釉ハギ・施釉	魚子状文様に笹

図版番号	掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	厚（cm）	色調	焼成	胎土	調整	備考
22	147	青磁	椀	土坑（撹乱）037	不明	不明	7.6		表面　10Y7/1 灰白 断面　10Y8/1 灰白	良	密	（内）施釉、（外）施釉・釉ハギ・削出高台	
22	148	骨製品	簪	土坑（撹乱）037	長 (8.5)	0.6	幅 0.8		表面　2.5Y2/8 灰白 断面　7.5Y5/1 褐灰	−	−	（表面）ミガキ	重さ　530.6g
22	149	染付	椀	撹乱 001	不明	不明	3.6		表面　N8/0 灰白 断面　N8/0 灰白	良	密	（内）施釉、（外）施釉・削出高台・釉ハギ・施釉	内面に「□店・京都綾小路烏丸」「杢」 外面に松葉文
23	150	木製品	枠南東隅柱	井戸 168 掘方	長 (62.0)	幅 11.9		11.8	−	−	−	（内）加工痕、（外）加工痕	
24	151	木製品	曲物底板	井戸 168 掘方	縦 21.3	横 (15.5)		0.7	−	−	−	（内）加工痕、（外）加工痕	
24	152	木製品	枠北東隅柱	井戸 168 掘方					−	−	−	（内）加工痕、（外）加工痕	
25	153	木製品	枠北西隅柱	井戸 168 掘方	長 (48.5)	幅 11.0		8.4	−	−	−	（内）加工痕、（外）加工痕	
26	154	木製品	柄杓	野壺 051	長 (18.7)	幅 13.9	高 (10.5)		−	−	−	（内）加工痕、（外）加工痕	曲物部 復元径：長径 13.9 cm 短径 12.5 cm 高：10.6 cm

V章　分　　析

Ⅴ章　分析－１

平安京左京七条一坊十二町跡における平安時代遺構基盤堆積物の形成年代

株式会社　古生態研究所
辻本裕也

はじめに

今回の分析調査では、平安京左京七条一坊十二町跡における平安時代の遺構の基盤をなす堆積物の形成年代に関する情報を得ることを目的として、堆積物中の植物遺体について放射性炭素年代測定を実施する。

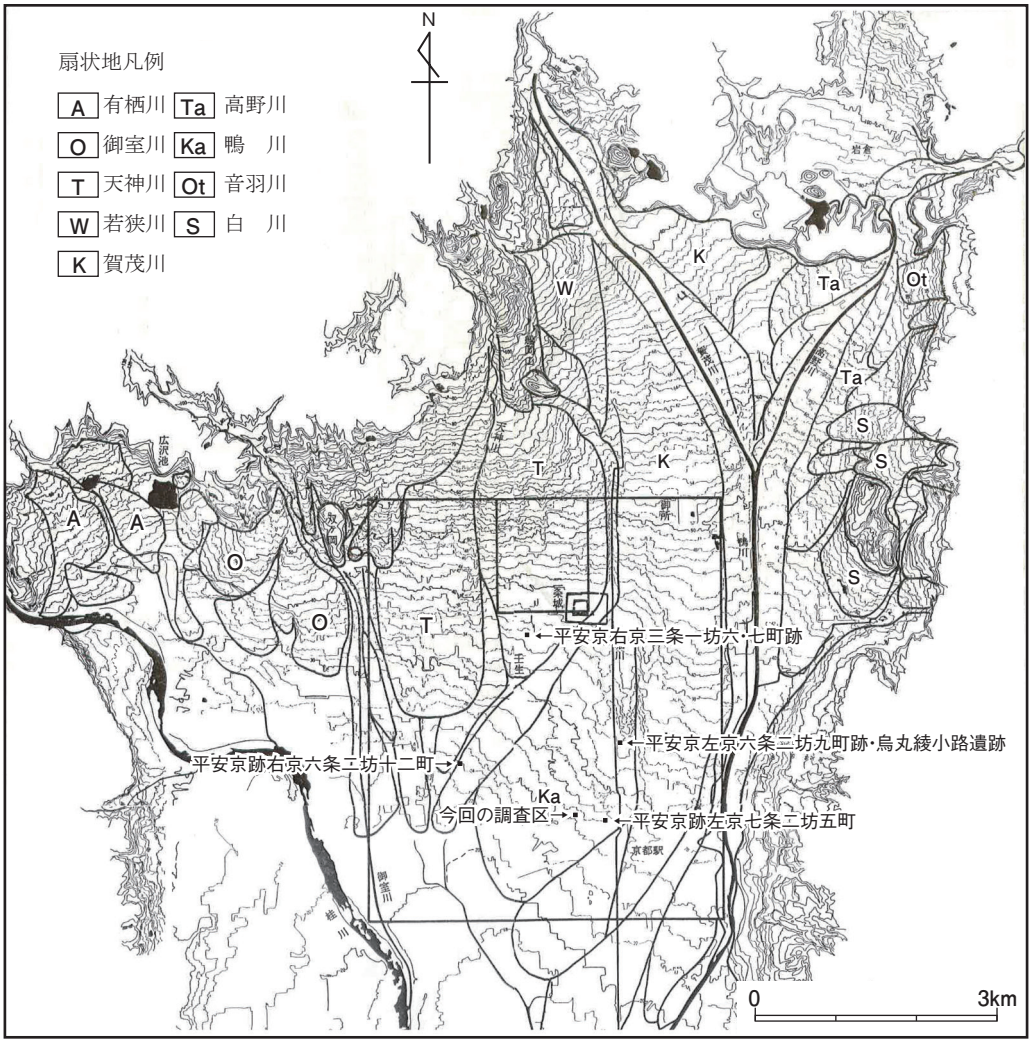
１　調査地点の層序

今回の調査地の立地は、京都盆地の扇状地区分（石田,1982）に基づくと、鴨川扇状地扇央に位置する（図１上図）。鴨川扇状地は御所の付近から南と南西とに延びる、賀茂川と高野川が合流して形成されたもので、賀茂川扇状地末端を切って高野川により形成された扇状地のようにみることもできるとされる。また、河角（2001）による平安京域の地形分類図に基づくと、扇状地帯からなる完新世段丘面Ⅳに位置する（図１下図）。完新世段丘面Ⅳは、古墳時代の広範囲におよぶ洪水氾濫堆積物の分布や 10 世紀頃までの流れていた旧河道の存在から、古墳時代や平安時代まで地形形成が継続した地形面であると指摘されている。

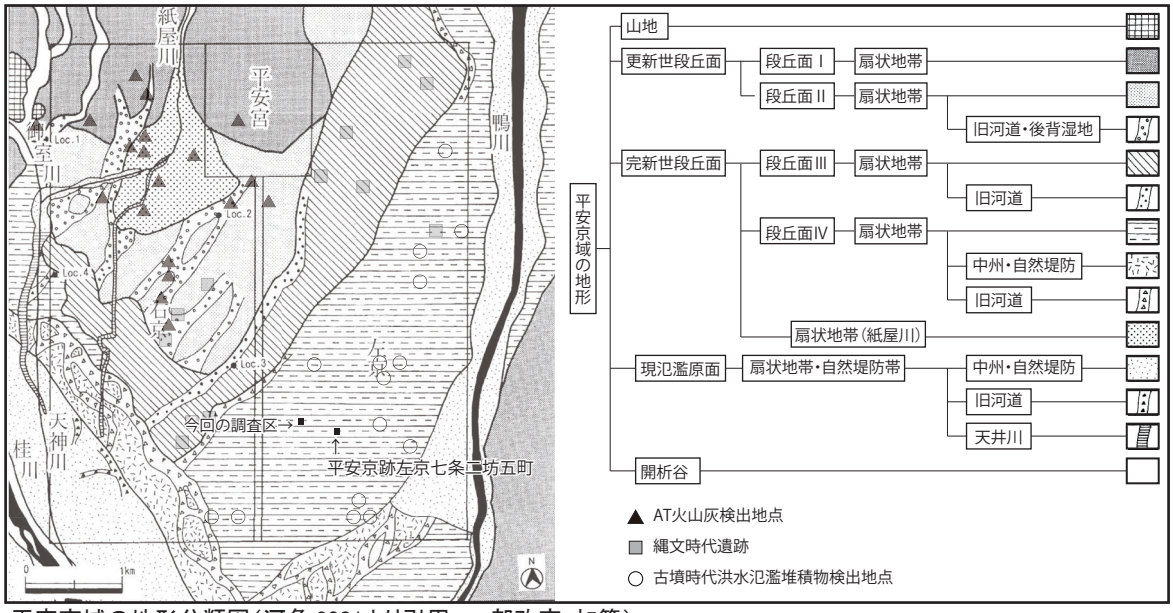
現在の地表面の１ｍ等高線図（中塚 , 本報告書Ⅴ章 分析－２）をみると、調査地の微地形は谷状の凹地に位置していることが確認される。この凹地は、下記するように今回の調査地の基盤堆積物の成因を踏まえると、扇状地形成に関わった流路跡、あるいは扇状地ロウブ（扇状地チャネル末端に形成された砂礫質堆積体）間の凹地の可能性がある。

調査区中部、東西方向に設定された深掘断面で確認された平安時代の遺構の基盤をなす堆積物の累重状況を図２に示す。層相および層理面の状況などから、上位より、大きく堆積ユニット１～５に区分される。基盤堆積物である堆積ユニット２～５は､網状流路での掃流移動した砂礫堆堆積物、その凹面に発達したとみられる小さな流路堆積物、洪水氾濫流から浮遊沈積した堆積物、これらの風化土壌化した堆積物などの扇状地堆積物からなる。

最下部の堆積ユニット５は、深掘トレンチ調査断面底部付近で確認される、大礫・中礫を主とする砂礫からなる。深掘トレンチ中西部の断面と平安時代の井戸遺構が重なる部分（12 地点）で確認された本層は、北東から南西へ向かっての一方向流の掃流によって運搬・堆積した、トラフ型斜交葉理・層理構造をなす礫支持の砂礫～礫層からなる。砂礫層上面は平坦ではなく起伏が認められ凹凸が著しく、凸部最上部で土壌化が多少進行している。深掘トレンチ周辺で検出されている複数の井戸断面で確認された基盤層の堆積状況を踏まえると、本層は側方および下方へ連続する可能性が高い。これらのことから、本層は、河床の浅い、頻繁に流路移動や分流を行ってい



京都盆地北部の扇状地と平安京図（石田,1982 より引用，一部抜粋・加筆）



平安京域の地形分類図（河角,2001より引用、一部改変・加筆）

図１　調査地の位置

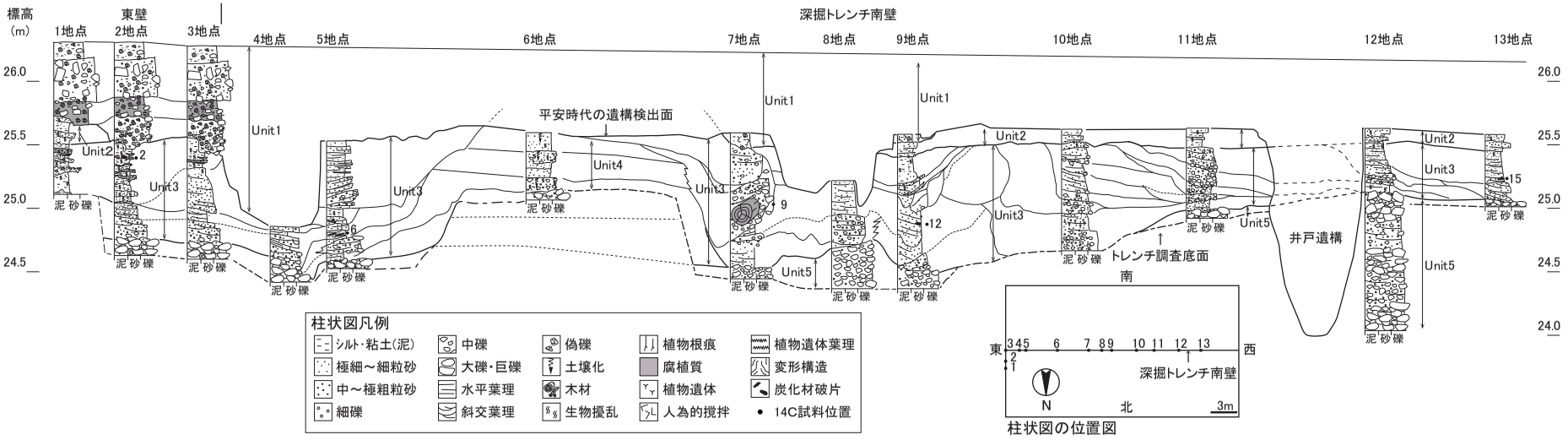
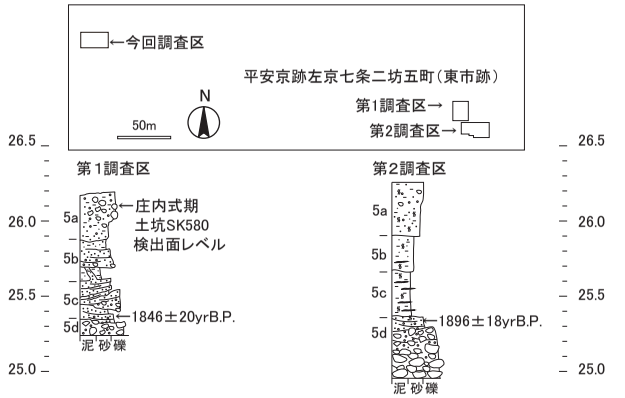


図２　平安京跡左京七条一坊十二町における遺構の基盤堆積物（深掘トレンチ）と年代測定試料採取位置図

表１　平安京跡左京七条一坊十二町の平安時代遺構基盤堆積物の^{14}C年代値・暦年較正結果

試料番号	試料状態	処理方法	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C年代 (yrBP)	暦年較正用年代 (yrBP)	暦年較正結果(cal BP) 1σ	暦年較正結果(cal BP) 2σ	Code No.
2	炭化材（イネ科）	AaA	−27.09±0.29	4,510±30	4,510±25	5292calBP – 5270calBP (10.5%) 5186calBP – 5125calBP (29.9%) 5110calBP – 5055calBP (27.8%)	5301calBP – 5212calBP (29.7%) 5196calBP – 5050calBP (65.8%)	IAAA-212498
6	植物遺体（広葉樹葉）	AaA	−31.47±0.24	4,440±30	4,439±26	5261calBP – 5247calBP (4.4%) 5234calBP – 5190calBP (16.1%) 5053calBP – 4969calBP (47.9%)	5279calBP – 5168calBP (31.3%) 5135calBP – 5102calBP (5.9%) 5071calBP – 4957calBP (52.0%) 4936calBP – 4880calBP (6.2%)	IAAA-212499
9	生材（広葉樹）	AaA	−30.33±0.22	4,450±30	4,449±26	5267calBP – 5187calBP (32.9%) 5122calBP – 5112calBP (3.2%) 5054calBP – 5025calBP (13.2%) 5014calBP – 4975calBP (18.9%)	5284calBP – 5162calBP (41.7%) 5140calBP – 4961calBP (53.6%) 4922calBP – 4919calBP (0.2%)	IAAA-212500
12	炭化材（カヤ）	AaA	−24.84±0.25	4,470±30	4,474±27	5277calBP – 5170calBP (48.4%) 5133calBP – 5104calBP (12.5%) 5063calBP – 5044calBP (7.4%)	5289calBP – 5155calBP (52.9%) 5148calBP – 5030calBP (35.9%) 5010calBP – 4978calBP (6.7%)	IAAA-212501
15	生材（モミ属）	AaA	−27.64±0.21	4,540±30	4,535±26	5315calBP – 5277calBP (21.2%) 5170calBP – 5133calBP (24.3%) 5104calBP – 5060calBP (22.7%)	5315calBP – 5256calBP (27.6%) 5249calBP – 5232calBP (2.7%) 5225calBP – 5215calBP (1.3%) 5192calBP – 5051calBP (64.0%)	IAAA-212502



調査地	暦年較正用 14C年代(yrBP)	暦年較正結果(cal BP) 2σ	code No.
第1調査区 Loc. 161019-04-1-②	1,846±20	1821calBP – 1711calBP (95.4%)	PLD-35382
第2調査区 Loc. 161019-01-3-①	1,896±18	1868calBP – 1853calBP (6.7%) 1837calBP – 1738calBP (88.7%)	PLD-35383

中塚(2018)に基づいて作成

図4　平安京跡左京七条二坊五町の層序・年代測定結果

た浅い流路で形成された砂礫堆堆積物の可能性が示唆される。調査地が鴨川扇状地上に立地すること、温暖湿潤地域の扇状地は、一般的に網状流路の堆積システムで形成されることが多い（チョーレーほか,1995）こと、増田（1999）による河川堆積作用の堆積学的特徴の解説にもとづくと、堆積ユニット５は網状河川の堆積システムで形成されたと推測される。

扇状地の網状河川では、一般的に河岸が低く、河床変動に関係する粒径集団の土砂移動が激しく、流路内の特定の場所で集中的に堆積が進行する。そのため扇状地の流路では、河床上昇とこれに伴う流路変更が発生しやすく、流路変更後には、それまで流下していた流路により形成されていたバーの地形の凹凸がそのまま残されるとされる（山本,2004）。本調査区の基底堆積物で認められた礫層の凹凸は、網状河川の流路移動に起因する氾濫性の微地形と推定される。

堆積ユニット４は、深掘トレンチ中東部付近の平安時代遺構検出面上に南北方向に帯状に露出する微高地上の高まりを構成する堆積物である。堆積ユニット５の上位の地層であるが、深掘トレンチでは堆積ユニット５から４にかけて連続する断面が作成されなかったため、堆積ユニット４中・下部の詳細については不明である。トレンチ断面で確認された垂直範囲では、逆級化成層をなす粗粒砂～細礫～細礫混じり極粗粒砂層、中粒砂～粗粒砂層が層状に積層している。各層準上部は風化・土壌化が進行している。また、本層上部は遺構形成期以降の掘削により消失しており、縁辺部は後述の堆積ユニット３形成時に侵食されている。本ユニットで確認された逆級化成層は洪水氾濫流起源の堆積物の示相構造（増田・伊勢屋,1985）である。微高地の詳細な成因は不明であるが、上記の堆積状況を踏まえると、堆積ユニット３形成期には砂州のような微地形であった可能性が高い。

堆積ユニット３は、堆積ユニット４の砂州の可能性がある微高地の西側と東側の凹地を充填する堆積物である。間欠的な洪水に伴う小さい流路充填堆積物の累重からなり、流路変動により、上方、側方に付加しながら積層している状況が確認される。各流路充填堆積物は、下部はトラフ型斜交葉理構造をなす砂礫層もしくは大礫混じり中粒～極粗粒砂層からなる。一部に洪水時の流木が取り込まれている（７地点）。その上位には洪水減衰期もしくは平常時の浅いトラフ型斜交葉理をなす掃流堆積物が累重している。このように侵食と堆積の繰り返しにより、微高地東・西側の凹地が充填されていき、微高地東側の凹地上部では、洪水氾濫時の浮遊泥が沈降堆積するような放棄流路のような堆積域に変化していたことが推定される。

堆積ユニット２は、堆積ユニット３形成後の平坦化した領域を覆う、逆級化成層をなす砂質泥～中粒砂層の積層からなる。各層準上部は土壌生成が進行している。これらのことから本ユニット形成期には、洪水氾濫時に流入してきた浮遊砂・泥などが沈積し、堆積後に土壌生成が進行するような堆積場に変化したことが推定される。

堆積ユニット１は、平安時代以降の人為的営力によって形成された堆積物である。深掘トレンチ東壁の本ユニット最下部には、人為的に生産されたとみられる堆積ユニット２由来の砂質泥～泥質砂の亜角ブロック土が散在する。

2　分析試料

深掘トレンチ断面で確認された堆積物のうち、堆積ユニット3は植物遺体を挟在するが、それ以外の堆積ユニット5・4・2では年代測定対象となる植物遺体が確認されなかった。そのため、植物放射性炭素年代測定は堆積ユニット3から出土した植物遺体5点について実施する。試料採取位置は図1に示す。また、試料の詳細は結果と合わせて後述する。

3　分析方法

試料の付着物を取り除いた後、酸 - アルカリ - 酸（AAA:Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常1 m ol/ ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と結果表に記載する。

化学処理後の試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させ、真空ラインで二酸化炭素を精製する。精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。グラファイトを内径1㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

測定方法は、加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）、^{14}C 濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。$\delta\ ^{13}C$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である。

^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach,1977）。^{14}C 年代値は $\delta\ ^{13}C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を結果表に示す。^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ = 68.2%）と 2 標準偏差（2 σ = 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、$\delta\ ^{13}C$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。暦年較正年代の計算には、IntCal20 データベース（Reimer et al.,2020）を用い、OxCalv4.4 較正プログラム（BronkRamsey,2020）を使用し、「cal BP」という単位で示す。

4　結果

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表１、各試料の暦年較正確率密度分布図・比較図および Intcal20 較正曲線に配した暦年較正確率密度分布図を図３に示す。以下に各試料の年代測定結果について示す。

試料 2：微高地東側の堆積ユニット 3 上部の洪水氾濫時に沈積した砂質泥層中の炭化したイネ科植物の破片。^{14}C 年代値は 4,510 ± 30yrBP、暦年較正年代は、2 σ で 5,301- 5,050 calBP を示した。

試料 6：堆積ユニット 3 流路減衰期に形成された葉理構造の発達する中～細粒砂層に挟在する植物遺体葉理を構成していた広葉樹の葉片である。^{14}C 年代値は 4,440 ± 30yrBP、暦年較正年代は 2 σ で 5,279-4,880 calBP を示した。

試料 9：堆積ユニット 3 の流路充填堆積物下部の砂礫層に取り込まれていた流木。遺存状態が著しく悪く、腐植化が進行しており、広葉樹であることは確認されたものの樹種を特定できなかった。最外年輪部分の ^{14}C 年代値は 4,450 ± 30yrBP、暦年較正年代は 2 σ で 5,284-4,919 calBP を示した。

試料 12：堆積ユニット 3 の斜交葉理の発達する中～細粒砂層中の炭化材片。樹種は高木となる常緑針葉樹のカヤに同定された。^{14}C 年代値は 4,470 ± 30yrBP、暦年較正年代は 2 σ で 5,289-4,978 calBP を示した。

試料 15：堆積ユニット 3 の極低角度のトラフ型斜交葉理の発達する砂層中に取り込まれていた木片。樹種は高木となる常緑針葉樹のモミ属に同定された。^{14}C 年代値は 4,540 ± 30yrBP、暦年較正年代は 2 σ で 5,315-5,051 calBP を示した。

5　考察

調査区深掘トレンチ断面で確認された平安時代の遺構の基盤をなす堆積物のうち、堆積ユニット 3 の植物遺体の年代値は、いずれも ^{14}C 年代で 4500 年前前後の近似する値を示した。この ^{14}C 年代値に対応する Intcal 較正曲線の範囲は、凹凸のある平坦区間に対応しているため、暦年較正年代を絞り込むことが難しく、5,279calBP から 4,919calBP の幅広い範囲を示した。この期間は、年代測定結果から土器型式の較正年代を絞っていくことが難しい「縄文時代中期の 4500 年問題」と呼ばれている（工藤 ,2012）。

小林（2008）による全国各地域の縄文時代中期の土器型式別の ^{14}C 年代値の一覧表をみると、福井・関西地域において、古い時期より、鷹島式で 4,830 ± 50yrBP、船元 1 式期で 4,560 ± 40yrBP、船元 3 式期 4,465 ± 35yrBP、船元 4 式期 4,350 ± 30yrBP、里木Ⅱ式期 4,490 ± 30yrBP、北白川Ｃ式で 4,050 ± 40yrBP の ^{14}C 年代値が報告されている。今回得られた堆積ユニット 3 の植物遺体の ^{14}C 年代値は、船元式期・里木Ⅱ式の ^{14}C 年代値に近似することが認識できる。測定した炭化材片や生材片の年代値は古木効果の影響を考慮する必要があるが、植物葉（試料 6）や流木（試料 9）の年代値はその影響が小さく、堆積年代の下限年代を示していると考えて良い。したがって、堆積ユニット 3 の形成年代は縄文時代中期の船元 1 式～里木Ⅱ式期頃と推定される。なお、縄文時代中期の ^{14}C 年代値が多数得られている関東地域のデータ（工藤 ,2012・小林 ,2008）を見ると、今回の年代

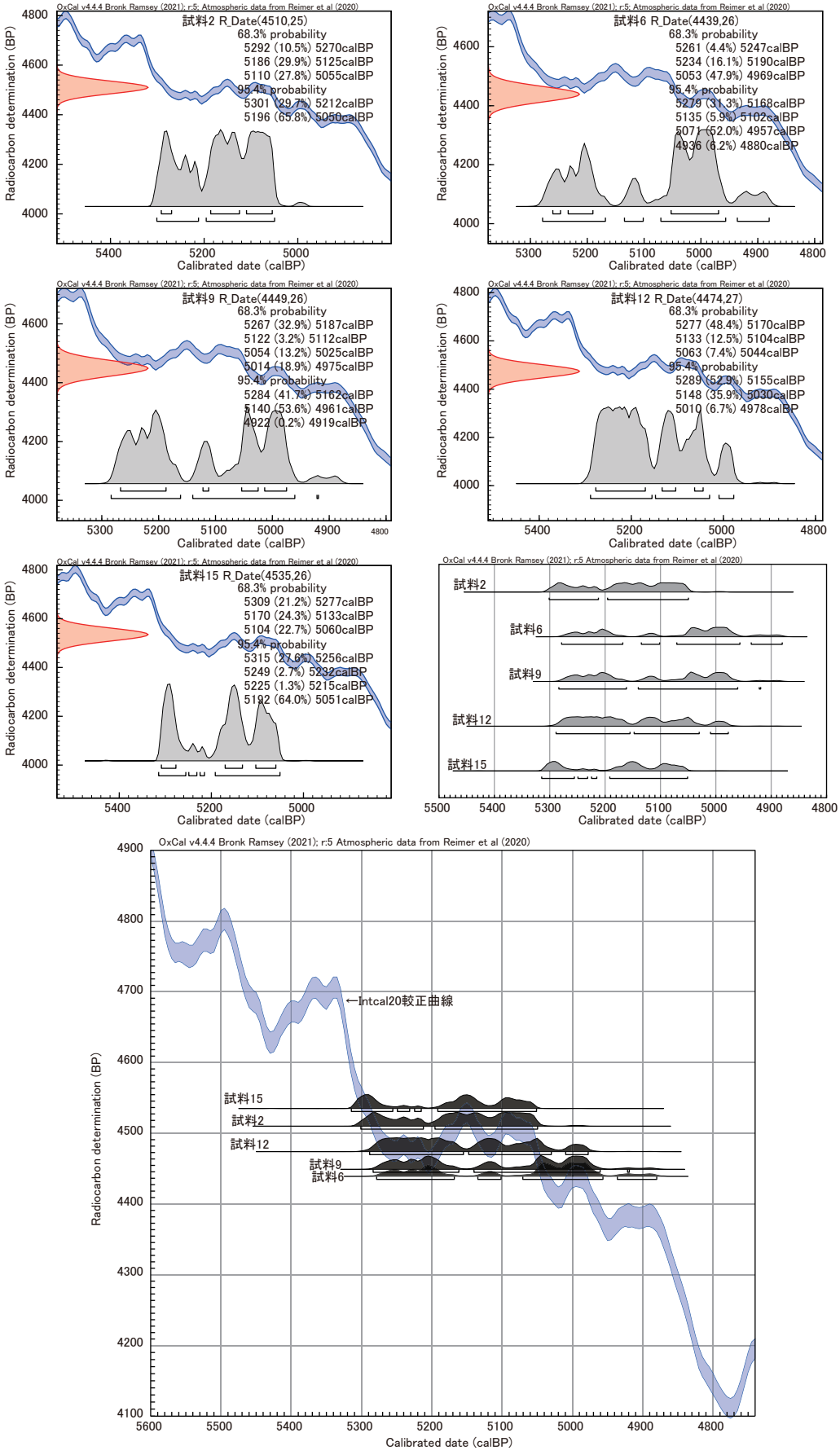


図3　平安京左京七条一坊十二町跡の平安時代遺構基盤堆積物の暦年較正確率密度分布図

値は縄文時代中期前半の土器型式の ^{14}C 年代値に相当する。本地域を含む近畿地方では、縄文時代中期の土器型式と ^{14}C 年代の関係に関するデータが少ないため、今後の蓄積をまって基盤堆積物の形成年代と考古編年との関係について再評価する必要がある。

以上、今回の調査地の平安時代の遺構の基盤をなす扇状地形成に関わった掃流堆積物は、縄文時代中期前半頃に形成されたことが推定される。当該期の調査地は扇状地の発達期であり、流域沿いの植生等はその影響を受け撹乱されたことが示唆される。今回測定対象とした植物遺体のうちモミ属は、温帯性針葉樹のモミに比定される可能性が高い。モミなどの温帯性針葉樹は扇状地などを更新適地とする樹木であり、当該期の扇状地の植生を構成する要素であったとみられる。

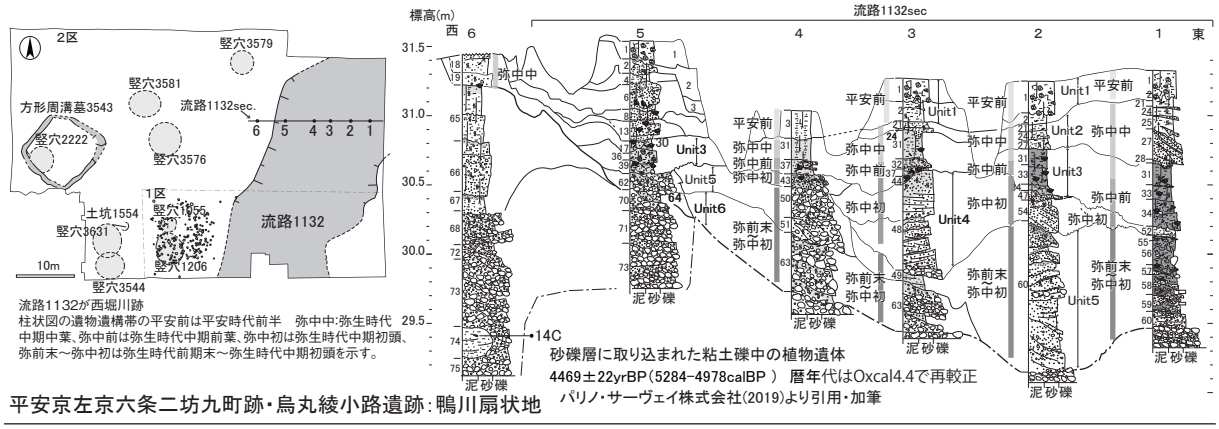
ところで、今回の調査区近東南東約 300m の平安京跡左京七条二坊五町跡でも平安時代遺構の基盤堆積物の年代値が得られている（図４）。そこでは平安時代の遺構の下位で庄内式古相期の遺構が確認されている。この遺構の基盤をなす流路堆積物の年代値は弥生時代後期と庄内式期の境界期を示唆しており、本流性流路地形の最終的な発達（堆積物充填･埋積＝周辺城への主流路変更）終了と遺跡立地が時系連続的におこなわれた可能性が示唆されている（中塚 ,2018）。今回の調査区では、この時期に該当する流路堆積物の存在については、平安時代以降の人間活動に伴う縄文時代中期層準までの削平のため特定できないが、少なくとも弥生時代後期と庄内式期の境界期には本調査区東側に流路が存在したことになる。

平安京域では、平安時代の遺構基盤堆積物の形成年代に関する報告例がいくつか存在する（図５）。鴨川扇状地では、本調査地北東側に位置する平安京左京六条二坊九町跡・烏丸綾小路遺跡の報告例が存在する（パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2018）。そこでは弥生時代中期の遺構の基盤をなす網状流路システムで形成された礫層中に取り込まれた、河床や側壁などの侵食により再堆積した粘土礫（同時礫）中の炭化物が 4,469 ± 22yrBP の ^{14}C 年代値を示している。この年代値は、今回の年代値と一致しており、当該期の扇状地は土砂流出が顕著であったことが示唆される。

一方、天神川扇状地末端に舌状に延びる新扇状地の扇端付近に位置する平安京跡右京六条二坊十二町では、平安時代前葉の西堀川跡の基盤をなす砂礫堆積物中の木材化石では 5,090 ± 30yBP、4,880 ± 30yBP の年代値が得られており、縄文時代前期後半に間欠的な土砂流出が起こっていたことが推定されている（古生態研究所 ,2021）。

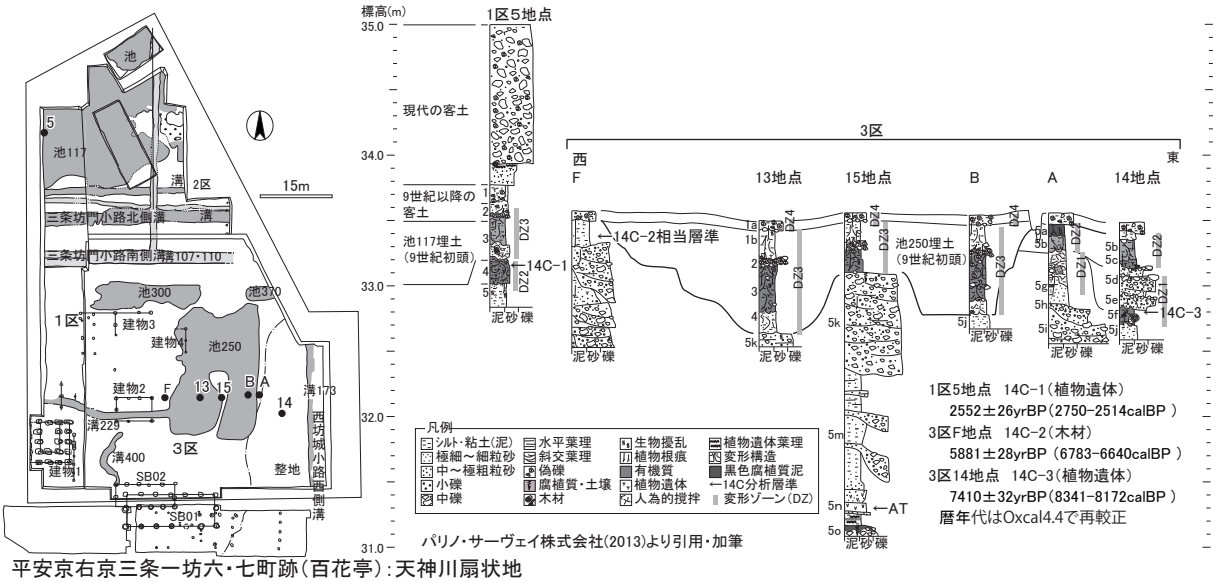
また、天神川扇状地扇央の埋没流路跡に位置する平安京右京三条一坊六・七町跡（百花亭）では、平安時代初頭の遺構の基盤をなす堆積物の年代値が得られている（パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2013）。調査区南部の平安時代の盛土直下の基盤堆積物砂礫層上部の木材で 5,881 ± 28yrBP、この砂礫層直下の有機質泥層で 7,410 ± 32yrBP の ^{14}C 年代値が得られている。また、調査地北部の池 117 遺構の基盤をなす腐植質泥層泥炭層中の植物遺体で 2,552 ± 26yrBP の年代値が得られている。なお、本地点では平安時代の遺構底面の下位 1.5 mの層準で姶良 Tn テフラ（AT）が確認されている。

以上の平安京域の基盤堆積物の年代値をみると、縄文時代前期～縄文時代中期前半頃に土砂流出が顕著な時期を挟在している可能性があるが、地域的な地形発達過程を捉えるためにはデータ



流路1132が西堀川跡
柱状図の遺物遺構帯の平安前は平安時代前半　弥中中:弥生時代中期中葉、弥中前は弥生時代中期前葉、弥中初は弥生時代中期初頭、弥前末～弥中初は弥生時代前期末～弥生時代中期初頭を示す。

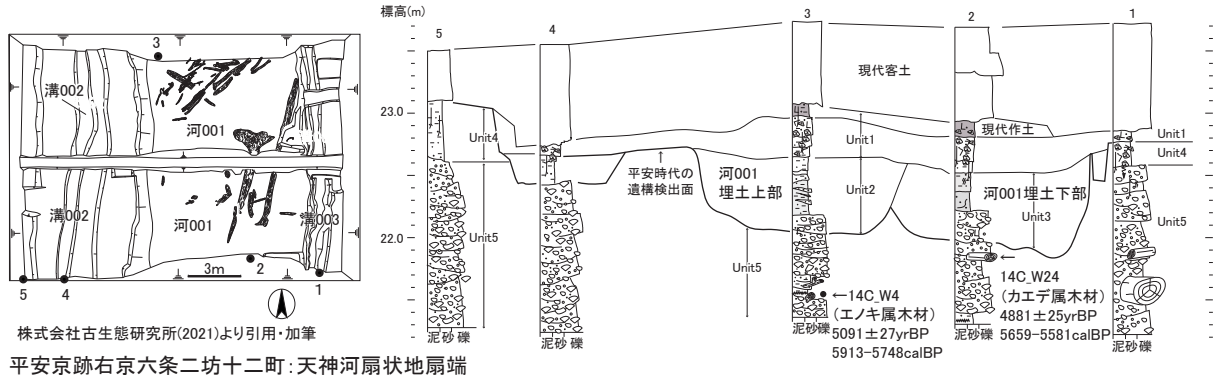
平安京左京六条二坊九町跡・烏丸綾小路遺跡:鴨川扇状地



1区5地点　14C-1(植物遺体)
2552±26yrBP(2750-2514calBP)
3区F地点　14C-2(木材)
5881±28yrBP (6783-6640calBP)
3区14地点　14C-3(植物遺体)
7410±32yrBP(8341-8172calBP)
暦年代はOxcal4.4で再較正

パリノ・サーヴェイ株式会社(2013)より引用・加筆

平安京右京三条一坊六・七町跡(百花亭):天神川扇状地



株式会社古生態研究所(2021)より引用・加筆

平安京跡右京六条二坊十二町:天神河扇状地扇端

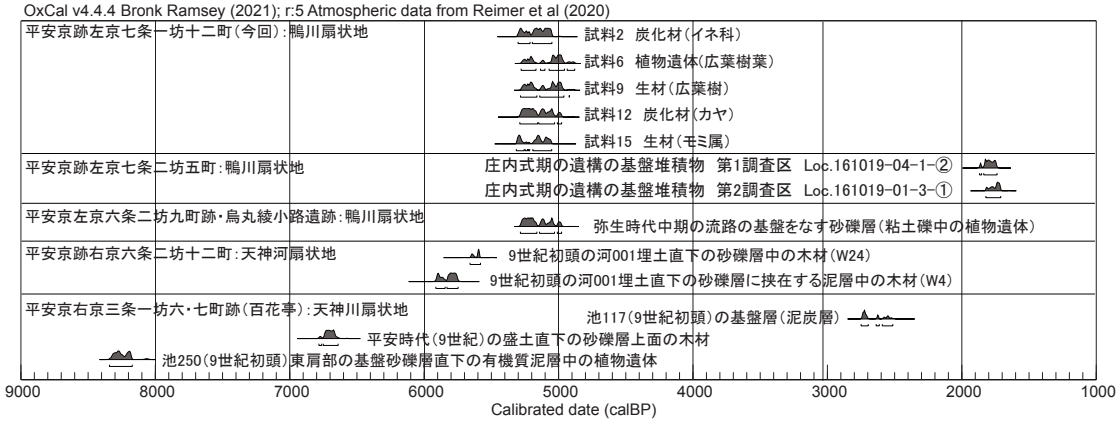


図５　平安京域における遺構の基盤層の年代測定事例

が充分でない。京都盆地における縄文時代の遺跡数は、中期以降順次増加する傾向が確認されている（千葉 ,1993）。今回の調査区の成果は、縄文時代中期以降の扇状地における人間活動を検討する上でも重要な資料となり、今後も自然・人間の複合動態を捉える上で遺構の基盤堆積物の形成年代を検討していくことの意義は大きいと考える。

【引用文献】

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1）, 337-360

チョーレー ,R.J.・シャム ,S.A.・サグデン ,D.E.,1995, 現代地形学 . 大内俊二訳 , 古今書院 ,692p.

石田志朗 ,1982, 京都盆地北部の扇状地 - 平安京遷都時の京都の地勢 - 古代文化 ,34, 1-14

河角龍典 ,2001, 平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷 . 考古学と自然科学 ,42,, 35-54.

小林謙一 ,2008,「縄文社会研究の新視点－炭素 14 年代測定の利用－」. 六一書房 ,293p.

株式会社　古生態研究所 ,2021, 平安京右京六条二坊十二町跡の古環境復元 .「平安京右京六条二坊十二町跡発掘調査報告書」, 株式会社文化財サービス ,27-44.

工藤雄一郎 ,2012, 旧石器・縄文時代の環境文化史 : 高精度放射性炭素年代測定と考古学 . 新泉社 ,373p.

増田富士雄 ,1999, 透水層・帯水層のトレース : ダイナミック地層学からのアプローチ . 地下水位技術 , 41,1-15.

増田富士夫・伊勢屋ふじ子 ,1985,“ 逆グレーディング構造”：自然堤防帯における氾濫洪水堆積物の示相堆積構造.　堆積学研究会会誌, 22・23, 108-116.

中塚 良 ,2018, 平安京跡左京七条二坊五町における地形形成過程と人間活動～古墳出現期前後の放射性炭素年代測定結果から～ ,「平安京跡左京七条二坊五町（東市跡）発掘調査報告書」, 龍谷大学 ,95-108.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2013, 付章 1　自然科学分析 .「平安京右京三条一坊六・七町跡－西三条第（百花亭）跡－」, 財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 133-171.

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2018 － 10

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2019, 付章 1　弥生時代流路 1132 堆積物の自然科学分析 .「平安京左京六条二坊九町跡・烏丸綾小路遺跡」, 公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所 ,110-148.

Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62(4), 725-757

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

千葉豊 ,1993, 京都盆地の縄文時代遺跡 . 京都大学構内遺跡調査研究年報 1993, 1989-1991: 53-73

山本晃一 ,2004, 構造沖積河川学 - その構造特性と動態 -. 山海堂 ,690p.

Ⅴ章　分析－２

京都盆地北部・
平安京左京七条一坊十二町周辺の地形条件

中塚 良

１．はじめに

今回の発掘調査地点を平安京条坊域地形条件図上にプロットし、近隣の先行調査地点を併記する（図１：各コードRov2022：今回調査地、Roc2018：左京七条二坊五町「東市跡」2016年度調査地.國下編,2018）。さらに、条坊域図の範囲を京都盆地北部基盤岩類深度分布図に定位する（図２）。いずれも新規に描き起こす。調査地は京都駅発JR嵯峨野線の「弧」を結ぶ標高26ｍ等高線の「弦」中心やや北に相当する。基盤岩面深度コンター-300・-350mT.P.の中間地点にあたる。

大地の表層のひとこま、発掘調査トレンチという点景Landscapeの来歴について、盆地全景との連続性をつうじて記載、考察する。端緒としてのふたつの平安京図解のこころみが、自然・人文双方に身をおくハイブリッドな、すなわち学理的複合を追究する筆者の役目と理解する。

２．図法

図１の基図、「平安京条坊復元図」（古代学協会・古代学研究所編,1994）をのぞき、全て防災科学関連成果からの引用、オーバーレイ資料である。1995年兵庫県南部地震以降、2011年東日本津波地震の発生と同時期に、地震災害を契機に上梓された京都盆地北部を対象とする自然災害関連誌の成果にもとづく。

〔地表の形態・構成物質・年代の組み合わせとしての地形面区分〕（図１）

平安京域の扇状地について石田（1982）は微起伏と地形面分布を図示した（本冊辻本引用、40頁）が、大縮尺ゆえに紙面構成上分割され利用困難であったことから、中塚・釜井（2011）は微起伏にあたる等高線を面区分図と分離し、不足を国土地理院地図の標高値で補い、また対象域を京南にひろげ、防災史研究を目的とした京都盆地北部地形条件図として再構成を試みた。平安京域全体における地形面区分については石田（1982）以降、第四紀層の地質年代的分布パターンを示す横山（1994）、地震災害危険度を低地を中心に視覚化する植村（1998）、第四紀発達史地形学的観点の河角（2004）の各成果を列記しうるが、石田・河角区分図が本冊に併載（40頁）されることから、ここでは地表形態と地質分布、断層活動と地形変動のかかわりを重視する植村の区分と微起伏条件の関係を示す。地形面名称は適宜アルファベットコードに改めた。なお、図学的課題と筆者のこれまでの知見にもとづく修整・変更箇所は次の諸点、①右京北西部および外縁の段丘面・谷底低地の輪郭・位置の補正、②平安宮東部・東縁における微地形条件との対応性にもとづく段丘・扇状地境界面（Lt´面）の補足、③右京域段丘面から南の扇状地面～沖積低地面に向け発達する新・旧２期の天井川地形面群（Rb、後者：西堀川Rb面）の分帯、である。なお、河角（2004）は低位段丘面形成年代条件として有意の始良Tn火山灰（AT）の検出地点を編集することから、縮尺精度をかんが

み条坊区画の基本単位である町オーダーでのATの分布を示す(1)。現況でテフラ検出層準・層相的情報が不明なことから、テフラ降灰以降の地形面形成過程における、即ち低位段丘面形成年代を上限とする流出・拡散範囲に相当すると考えざるをえない。

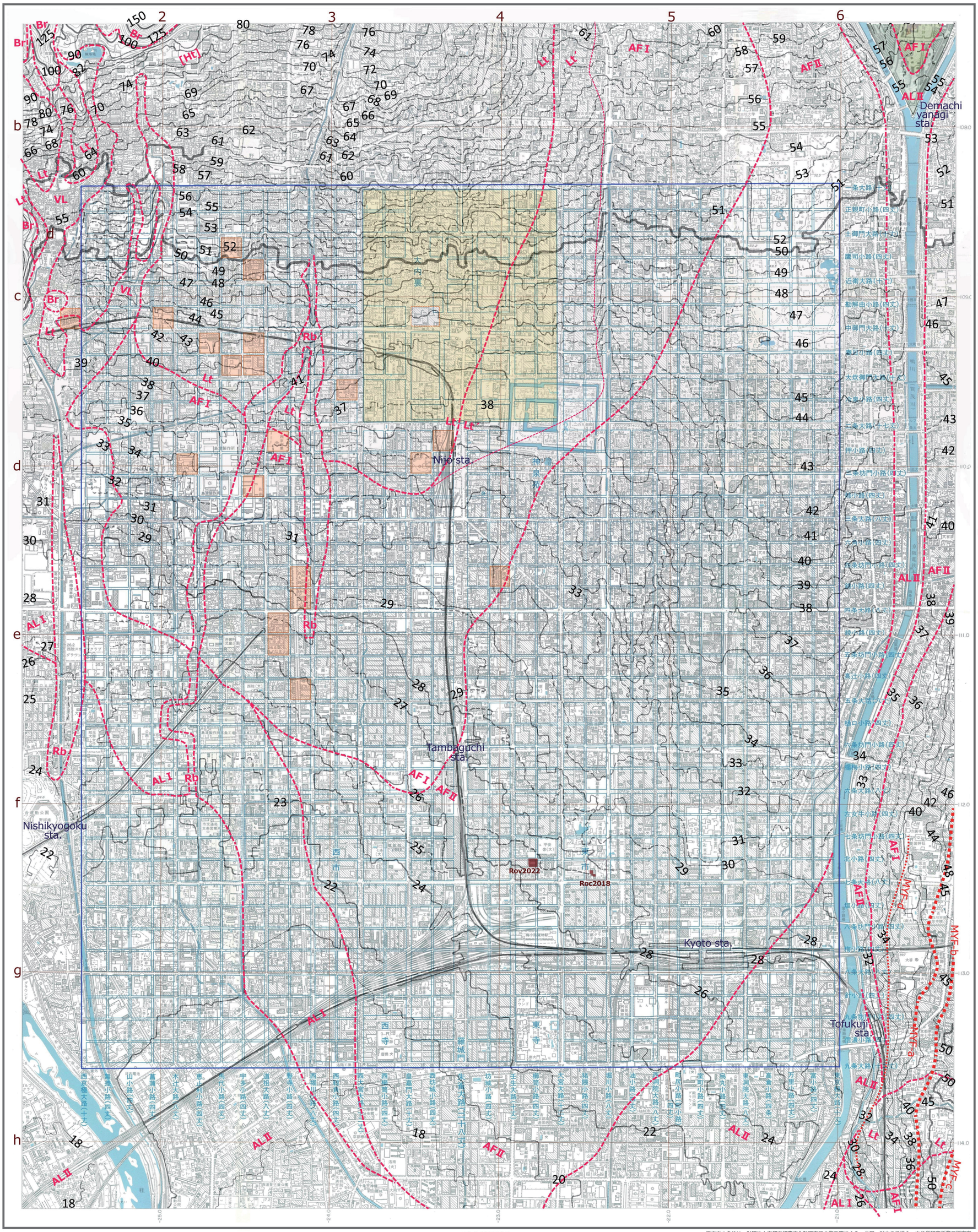
〔地表面構成物質、第四紀層の基底面としての基盤岩類深度分布〕（図２）

前述、京都盆地北部地形条件図に図１範囲（青色鎖線）を示し、地表に露出する基盤岩類と第四紀層分布（各濃・淡灰色に彩色、産総研,2005）、第四紀後期断層活動期における大阪層群上部層の最終堆積面に相当すると考えられる高位段丘面(2)の分布（淡灰色彩色・コードHt、国土地理院編,2022の記載を補足）、高位段丘面形成・変動の主因である活断層分布（国土地理院編,2022・産総研編,2005）、深層地質ボーリング調査と重力・反射法探査成果の比較にもとづく基盤岩類深度分布（T.P.-m、等高線50m間隔、（財）京都市防災協会編,2001；京都市編,2003）の４面を重合する。過去約240万年間の第四紀堆積物を剥ぎ取った、第四紀断層活動を履歴した京都盆地の骨格と、条坊遺跡の二都を含む現景観の対比にあたる。桂川・宇治川・木津川合流部の大山崎－男山地峡の深度-50m以浅（最浅実測値：＋6m T.P.2021年夏季調査）の基盤岩面を各流域の遷急点とする変動地形発達史を考察うえで今後重要な資料となりうる。作図にあたり、図幅左下凡例図にしめす長岡京跡右京第437・1207次調査（星印：中塚,2020）が契機となった。ここでは向日丘陵南端近くの高位段丘面構成層を低角スラスト状に断層変位させる地変の痕跡が検出され、遺構検出状況とあわせ歴史時代地震活動とのかかわりについて目下検討中である。なお、基盤岩深度分布図のあつかいについて、オリジナルがA4版を割りかく淡彩色表現図であることから、より大縮尺にあたる本図の縮尺精度に留意されたい。

３．平安京左京七条一坊十二町周辺の地形条件と地形面年代

〔扇状地Ⅱ面の傾斜変換点としての調査地点〕

調査地（図１：Rov2022）は南西～南南西向きの傾斜を示す扇状地面に位置する。植村（1998）のAFⅡ面、河角（2004）の完新世段丘面、石田（1982）の鴨川扇状地面にあたる。今回調査地の地形面構成層について、微量であったが高野川上流比叡山系に由来すると推測される閃緑岩質岩のコアストーンが確認できること、砕屑性堆積物が花崗岩質のマトリクスで構成される傾向から、東山の白川花崗岩地域を含む鴨川・高野川流域両者の合成扇状地に相当すると解釈される(3)。さて地形条件について、調査地南の26m等高線付近を境に緩傾斜面に転じ、対岸の桂川の氾濫原的斜度に徐々に移行していく。AFⅠ・Ⅱ面は扇面斜度、空中写真での色相差、形成年代差（Ⅰ面離水・堆積域のⅡ面への移動：中世後期）をてがかりに区分すると記載されるが、年代観はこれまでの成果とおおきくことなる。地形面形成期を示唆する^{14}C年代について、今回調査地が4440yB.P.＞4540yB.P.（縄文時代中期前半）、東方の大宮キャンパス調査地（Roc2018）が1845・1895yB.P.（古墳時代初頭、地形面利用の上限遺構の型式年代：庄内式古段階）をしめす。いずれも、これらに後続する河川性堆積物が確認されない。AFⅡ面形成・離水年代がおおきく遡及し、他方、中世段階を含め河川活動がおよぶ地形条件下にあったエリアもあわせて存在した可能性が示唆される。同



S=1:20,000

0 500 1,000 m

平安京の条坊は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所の復元案による。作図 (財)古代学協会・古代学研究所第三研究室
京都市長の承認を得て同市発行の都市計画基本図 調整

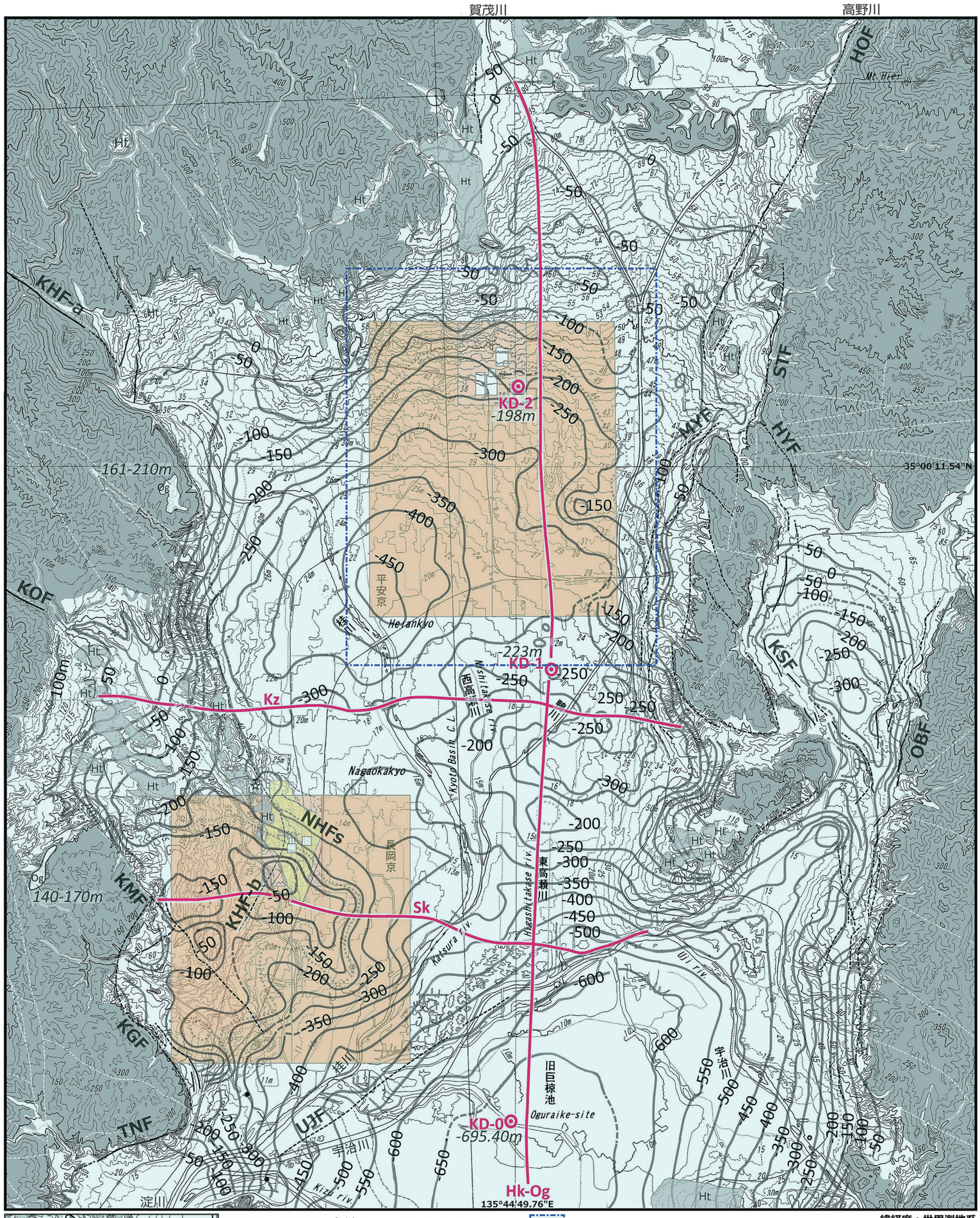
調製年月 平成 3 年 3 月
朝日航洋株式会社 調製

◇地形条件図＊１の構成内容〔等高線＊２：低地部１m間隔、黒色実線・破線を交互配置。地形面・活断層分布＊３：各赤色破線、朱色破線・点線で分区。姶良Tn火山灰(AT)分布＊４：条坊区画に橙色で図示〕

＊１：(財)古代学協会・古代学研究所編(1994)『平安京提要』付録「平安京条坊復元図」基図(日本測地系)に＊２～４をオーバーレイ。＊２：中塚・釜井(2011)「京都盆地北部地形条件図」『長岡宮都図譜』原図。

＊３：植村(1998)「京都盆地の地震災害危険度マップ」地形面区分を一部修整、コード名再構成。＊４：河角(2004)「AT火山灰分布」『京都歴史災害研究』第1号p.p15原図。

図１　平安京条坊域地形条件図



中塚・釜井(2011)地形条件図と(財)京都市防災協会・京都市編(2003)資料を合成編集。

活断層名〔盆地東縁(HOF:花折断層 STF:鹿ケ谷断層 MYF:桃山断層
HYF:花山断層 KSF:勧修寺断層 OBF:黄檗断層)
盆地西縁(KHF:樫原断層＊ KOF:亀岡断層 NHFs:長岡宮北辺断層群
KMF:光明寺断層 KGF:金ケ原断層)
盆地北部南縁(TNF:天王山断層 UJF:宇治川断層)〕
＊KHF-a・b:国土地理院,産総研の各断層分布図による。

図２　京都盆地北部基盤岩類深度分布図・宮都配置図

様にＡＦⅠ面（河角区分図における更新世段丘Ⅱ面相当）においても、ＡＴ層準を厚く被覆する扇状地礫層に挟在する試料から5881・7410yB.P.（縄文時代前期前葉・早期）の沖積段丘相当の年代値がえられるという（平安宮南縁、右京三条一坊六・七町。本冊辻本報文47頁図５参照）。ただし、植村（1998）が指摘するように低位段丘面形成以降、扇状地面形成場が西から南東にむけ移動していく傾向を、南東傾斜の傾動運動を素因とみることについて、高低の地形面の偏在性や姶良Tn火山灰の分布パターンまた地形面構成層の放射年代値の新・旧分布傾向の印象からみて、解釈可能とおもわれる。

〔平安京条坊域周辺の地下構造と地形・水文条件〕

上述、地形面配列と構造運動履歴の関係性への言及について、盆地の骨格をしめす図２を用い若干の検討をすすめたい。基盤岩類深度分布パターンは平安京域のほぼ北東-南西の対角と各延長方向を軸とする最大深度-450mT.P.に達する凹地と、段丘面群の分布する京域北西側における北東走向の整った直線的な斜面の伏在を示唆している。南東向き傾動の影響下における地形面形成過程の解釈に調和的な形態である。基盤岩類斜面上位における高位段丘面の分布パターンがこれを支持する。なお、京域南西角付近を最深部とする船底的な盆状構造は、第四紀の古地理を考察する上で重要な意味をもつと考えられる。盆状地形と周縁河川の配置関係に着目することによって、平安京域扇状地面群の南西向きの発達史的地形条件と基盤岩面以浅の集水・地下水流動ポテンシャルの整合性を、他方、現況鴨川ルートの扇状地面との非整合すなわち宮都造営過程における流路の人工改変の存在をあらためて、当然のことながら想起しうるのである。なお、北東－南西軸の船底状盆地の南西延長には京都盆地西縁断層のひとつ、樫原断層による変動地形である向日丘陵の直下において、同様の走向をなす深度-200ｍT.P.以深の谷状地形をみいだせる。東西圧縮応力場における北東向きの共役的な断層が、盆地を斜交するように伏在する可能性が想起される。盆地東縁を画す花折断層（吉岡,1987；岡田,2007）と大局的には雁行、併行関係にある。今後の探査的、野外調査的検証がまたれる。

４．小結

今回大宮荘トレンチ調査において扇状地Ⅱ面（植村,1998）の形成年代が4440yB.P.の縄文時代中期前半に遡及することが判明した。先行調査地（國下編,2018；中塚,2018）の庄内式期の地形面形成年代成果と併せ、従前の扇状地発達史の細部について再考が要される。他方、管見では近年得られた地形面構成層の年代値は隣接調査地点間においてことなり一見多様であり、扇状地面が小規模に、いわばパッチワーク状に形成された印象をうける。ただし植村（1998）の示唆のごとく、基盤の傾動履歴を背景に面形成場が現況鴨川筋の東方に向けて時系的に移動した可能性が考えられる。既知の地形・地質年代情報の精査とともに、今後ともデータのさらなる蓄積が要される。

今一度、図２の盆地南部に眼を転じておきたい。先に筆者は長岡京左京域・桂川低地遺跡群の3490yB.P.以降古墳時代にかけての流路堆積物の^{14}Ｃ年代を整理し、L1:3460、L2:2910、L3:2680、L4:2200、L5:2120、L6:1820、L7:1600yB.P.の各流路形成基準面の低下期（地形面開析期）を抽出し

た（中塚,2021）。前述、天王山－大山崎地峡基盤岩面（遷急点）における砕屑物貯留と排出の間欠的なくりかえしを想定した地形形成過程モデルにあたる。地形面形成をおこなう主流路は面形成終了後次なる形成場をもとめて、また、遷急点付近における貯留物質の排出によって開析に転じると推測される。氾濫原面におけるデータにもとづく解釈であるが、上流域は扇状地面に連続することから、平安京域成果との対比の可能性、両者の発達史的連動性について留意したい。

註

（1）京都市内の遺跡調査にともなって検出された火山灰試料について、近年、竜子（2015a・b）が整理している。

（2）高位段丘面形成年代について、盆地西縁変動地形の地質層序・発達史的情報を踏まえ整理する。段丘構成層下位層準において大阪層群海成粘土層Ma6ないしMa7の積層が確認される。各推定年代は火山灰層序との比較からMa6が580-560ka(ka:1000年)、Ma7下位が520kaとされる（京都市編,2002)。他方、以浅の高位段丘堆積面に至る層序において、堆積盆において連続性をもって成層するMa9(基底：420ka)の分布を確認しえない。Ma6～Ma9層準の間に、断層変位にともなう堆積盆の地形的分化を特徴づける段丘面の形成・離水があったと推察される。近年、火山灰層序学的成果として、京都盆地西縁活断層系北部における山間盆地形成開始期の年代、約471-552kaが推定された（小滝ほか,2011)。推定年代と上述をあわせ、盆地西縁における高位段丘面群形成開始期をおよそ470-420kaの地質年代幅でとらえうる。

（3）なお、鴨川・高瀬川合成扇状地面と桂川氾濫原面の境界を理解する上で、山間地を含めた各流域の地質条件的差異についての比較の重要性を実例に則して述べたことがある（辻本,2020補註稿)。

【文献】

・石田志朗「京都盆地北部の扇状地－平安京遷都時の京都の地勢－」『古代文化』34 1-14頁 1982年
・植村善博『京都市周辺の地震災害危険度マップの作成(3万分の1地震災害危険度マップおよび説明書)・平成9年度　京都市震災対策調査研究報告書』70頁 1998年
・岡田篤正「花折断層南部における諸性質と吉田山周辺の地形発達」『歴史都市防災論文集』vol.1 37-44頁 立命館大学歴史都市防災研究センター 2007年
・河角龍典「歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化－遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築－」『京都歴史災害研究』第1号13-231頁 2004年
・京都市編『京都盆地の地下構造に関する調査成果報告書』46頁 2003年
・京都市・京都市消防局防災対策室編『京都の活断層第2版』2002年
・(財)京都市防災協会編『地下構造と活断層の調査』2001年
・國下多美樹編『平安京左京七条二坊五町（東市跡）発掘調査報告書』龍谷大学 2018年
・国土地理院編「都市圏活断層図(ver.2022)」
https://maps.gsi.go.jp/#13/34.976916/135.648365/&base=std&ls=std%7Cafm%7Cafm_spec&blend=0&disp=110&lcd=afm_spec&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0&d=m
・(財)古代学協会・古代学研究所編「平安京条坊復元図」『平安京提要』角川書店 1994年
・小滝篤夫・加藤茂弘・木谷幹一「京都府南丹市,神吉盆地のボーリングコア中の大山火山起源の中期更新世テフラとその意義」『第四紀研究』50-1 35-48頁 2011年

・産総研編「５万分の１地質図幅 京都西南部（2005）」
https://gbank.gsj.jp/geonavi/geonavi.php#13,34.92712,135.69147
・辻本裕也「付章１ 自然科学分析」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書 2020-2：平安京右京九条二坊四・五町跡、唐橋遺跡』49-67頁 2020年
・中塚 良・釜井俊孝『長岡宮都図譜～都の自然景観と防災の考古学～』同朋舎 2011年
・中塚 良「平安京跡左京七条二坊五町における地形形成過程と人間活動 ～古墳出現期前後の放射性炭素年代測定成果から～」『平安京跡左京七条二坊五町（東市跡）発掘調査報告書』95-108頁 龍谷大学 2018年
・中塚 良「長岡京跡右京第1207次（7ANBNO-11地区）～右京北一条二坊一町宝菩提院廃寺～」『年報都城』32 42-43頁 (公財)向日市埋蔵文化財センター 2020年
・中塚 良「水辺の遺跡の自然地理学的研究－京都盆地北西部低地の変動と縄文・弥生時代地震履歴－」『立命館文学』672 199-219頁 2021年
・横山卓雄「京都盆地の自然環境」『平安京提要』27-48頁 角川書店 1994年
・吉岡敏和「京都盆地周縁部における第四紀の断層活動および盆地形成過程」『第四紀研究』26-2 97-109頁 1987年
・竜子正彦「京都市内の火山灰」『リーフレット京都』No.320（公財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古学資料館 2015年（a）
・竜子正彦「京都市内の火山灰２－火山灰の利用－」『リーフレット京都』No.324（公財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古学資料館 2015年（b）